又現像には四季の温度が其結果に關係を及ぼす事は甚大であります。

露出假令正鴻を得、現像液處方正當であつたとしても、嚴寒の季節に現像處理中少しの温度をも與へなかつたならば、決して良好の結果は得られるものではありません。

然らば其結果はどんな風になるかと申しまするに、光線を強く受けたる部分だけが乘るのみであつて、陰影部の處は中々容易に現はれ難いのであります。

而して陽部に適當の乘りを得る迄にも、非常に長時間を要するのであります。

而して出來上りの結果は謂所ドキツキ、スヌケの極めて惡調子の種板を得る事になります

然るを、之に適當なる温度を加へたる現像液にて處理したならば現像時間も速く、第一現像の乘り具合も順序良く、實に見違へる樣な立派な原板が得られるのであります。

然らば如何樣にして温度を與へるかと申しますと、色々行り方もありませうが、私は左の方法に致して居ります。

最初に能く起りたる炭火を火鉢に盛り、之に水を盛りたる土瓶又は鐵瓶を掛け、之を現像すべき暗室内に入れ置き、戸を閉ぢ暗室内の空氣を華氏の約六十度位に暖めるのであります。

勿論暗室には、適當な空氣拔けの設備は爲て置かねばなりません。若し之を怠たつたならば、炭酸瓦斯がこもつて由々敷中毒を起しますから、切に御用心を願ふて置きます。

殊に、入れたての生炭は、非常に害を來たすものでありますから、少なくも半分位赤くなつた炭火をのみ用ゆる事に致したいのであります。

世間往々生炭を氣なしに用ひたが爲に、非常に頭痛を起して倒れた例は澤山にありますから必ず忘れてはなりません。

扨前に立歸りまして、暗室が六十度位に暖まつたならば、火鉢の上に掛けてある土瓶の湯を平等一面に、バットの中に注ぎ入れ能く振

り動かして、二三十秒を經過したら、流しにサット明けて仕舞ふのです。

而して、手の甲をバットの平面に當てゝ見て、約八九十度位の溫度(暖く感ずる位)と思ふ頃を計りて、乾板をバットに入れて、現像液を注ぐのであります。

左すれば、丁度四五十度位の液溫となりて、極めて順調に現像の進行を見る譯であります。

且つ火上の土瓶の湯は、自然空氣の乾燥を和らげ、衞生上にも大に有効であり、所謂一擧兩得と申すべき良法であらうと思ひます。

尙現像液のみならず、ハイポー液にも時々適宜の熱湯を注入して

液の温度を保たしむれば、ヌケの進行を速かならしむるのであります。

之は餘り高温にすれば（スカヌケ）となつて陰影部のデテールを消滅する恐れがありますから、液温は四十度位より昇らぬ樣に致したいのであります。

之に反して大暑の候になりますと、現像液が餘り温くなり過ぎますから自然現像の働きが猛烈になりますので隨つて種板に（カブリ）を來す事になり易いのであります。

（カブリ）を來すまてにならなくとも畫の調子を平板となし大切の（グラデーション）を破壞する事になるのです。

夫れに、液温高きに過る時は（ゼラチン）膜を弱らしめ、甚しいのはべロ〳〵となつて溶けて仕舞ふ樣な事にもなり、又左程にまで成らなくとも、縮緬肌になつて見たり、畫線が捩れて見たり、極く輕症としても、膜面が荒びて仕舞ふ事になります。

そこで之を防ぐには如何樣になしたら良いかと申ますと、私は第一に現像時を比較的冷涼なる早朝に撰む事に致して居ります。

而してハイポー液は前夜より臺處の床下に入れて置きますと翌朝までには意外に冷却されて居るものです。尤も經費の點さへ構わなければ液中に適宜の氷片を投入すれば結構ですし現像液にも少許の氷片を用ゆれば、いと容易い譯であります。

而してハイポー前後に良好の固膜液に浸して、流水を利用し約一時間の水洗を爲して、施風器又は風通し良き日陰にて乾せば、直に乾燥するものです。

夫れから原板に黄ろい色の有ると無いとは、畫調に大變な影響を來すものであります。

黄ろい色が濃くなればなるほど畫の調子が堅くなり、丸でガチガチになつて仕舞ひます。

如何に良く露出が與えられ、如何に良く現像されて居る完全無缺の原板であつても、一度現像の際誤つて原板に黄ろい色を附けたならば、其原板からは到底良好な調子の畫は得られないのであります。

其厭ふ可き黄ろい色は、如何にして付くやと申ますと、主に現像液中の亞硫酸曹達の効力の乏しきに依るのであります。

亞硫酸曹達は酸化し易い藥品でありますから、一旦栓を拔いたものを保存する際は、十二分の密栓を施して空氣の通入を防がなければなりません。

又始より亞硫酸其物が不純良のものであれば、効力の乏しいものでありますから、左樣の場合は惜げなく棄て仕舞つて他の良品を撰び、速かに之に代へる事が肝要です。

第二には、ハイポー液中の酸の缺乏から種板に色付く事も中々多い樣です。

ハイボー液中の酸は、日々其效力を減じて居りますから、假令ハイボーの効目があつても、酸丈けは己に〳〵効目が薄らいで居る事が常ですから、先つ使用の都度適宜に酸液を滴下して、之を補ふ樣にするが尤も安全の策であります。

夫れから殊に夏時中現像しゝある際に、餘り度々現像進行の工合を見る時は、其都度原板に附着したる現像液が空氣に曝露さるゝ事になりますから、自在原板に着色する事になる樣です。

序ながら申し上げて置きますが、新調合の定着液を使用する時は餘り効き過ぎて原板を淡くする恐れがありますから、其の積りにて始めより濃い目に現像して置く方が宜しいのであります。

尤も私は近來現像の方よりか、ハイボー新液中に在來使用の舊液上澄の處を三分の一量位混入して使つて居りますが、始より淡くなる憂は無くて至極好結果が得られて居ります。

今迄は光線の强弱による現像法、第二に露出の過不足に對する現像法、第三には被寫物體に對する現像法、及び寒暑に對する現像法、次は汚色に關する現像法に就きて申し上げ來りましたが、茲には良好なる光線により適度に露出されたる原板を現像するには、如何なる濃度を以て果して適當とするやと云ふ問題に遷りませう。

先づ現像が過ぎたとします（人物撮影に就て）第二に陽部の微密が飛んで仕舞ひます。則ち最も大切である可き陽部の皮膚の感じ

を抹殺して仕舞ひ、蠟石か何ぞの樣な固い感じのする物にならしむるのであります。

又生え際の生毛が無くなるか、眉毛などは實際に見るよりはズット淡くなつて仕舞ひます。

又白髮白髯等は一本一本の形を失ふて平一面の大理石か白布見た樣なものになつて仕舞ふのであります。

尙ほ衣服に致しますと、ホワイトシャツは布と云ふ感じを失ふて矢張大理石の樣になり、勳章は模樣を失ひ、衣服の淡き模樣殊に夏の絽の裾模樣などは、全然見えなくなると云ふ有樣です。

景色に於ても同樣です。大切な主眼なる可き富士の山が現はれ

て居なかつたり、波がゴッ〳〵として障れば怪我でも仕さうな風に寫つて見たり、慥かに寫つてあるべき大事な雲が少しも現はれて居なかつたりするのは、大抵現像過ぎから來る事が多いのであります。

又現像不足の場合はごんな風になるかと申しますと、白くあるべきものが白くなかつたり、蔭影部などの十分寫されある可きものが現はれずに居つたり、種板全體に於て照應に乏しき誠に弱々數、力の附く可き處にさへ力が附かず、印畫しても實に淡つぽい活氣のない病者の如きものになるのが夫れであります。

斯樣な譯合でありますから、人物撮影であれば、無論人物の顏面が主要點でありますから、現像過の處に申しました通り顏面の皮膚を

潰して仕舞たり、眉毛が消えて仕舞ふ樣になるまでも、乘せ過ぎない樣に注意ありたいものです。

景色であれば矢張人物同樣畫中の主要點を考へて、其主要物を最も明瞭に寫し出すと云ふ事に心掛けねばなりませぬ。

例へば富士山を主要物としたならば、何處までも富士山を最も明確に寫し出す事に心掛けて現像すべきであります。

其他器械にせよ、建物にせよ、必ず主要とする處がありますから、其主要物を目的として現像すべきであります。

尤も種板の濃度も印畫すべき印畫紙の性質にも大に關係がありますから、何時も一樣の濃度にして間違ひないとは申されません。

譬へばアーチユラの樣な紙にした處で、同一製造元から來るものでさへ、輸入の都度調子が變つて居て、中々安心は出來ないのであります。

當節では殊に其の變り方が甚だしい樣に思はれます。

夫れに當今では內地製も出來る樣になりましたが、是が舶來品とは大變な違ひで、先づ舶來品に適する原板の三倍の濃度にしてもよい位でありますから、實に驚かされるのであります。

此紙は種板を透見して見え得る限りの調子が燒き現はし得ると云ふ恐る可き性質を持つた紙のやうであります。

之に反し舶來の紙は一寸古いものなどになると、種板で見た(ハー

フトーン)の半分も燒き出す力のないのさへある樣です。

先づ斯樣な譯合でありますから、到底、何時も一定濃度の原板を造り置くと云ふ譯には參りませんから、其時買入れて置いた印畫紙の性質に應じて、臨機應變の處置を採るより外はないのであります。

一寸前に述べて置きましたが、被寫物體とレンズとの間に强烈なる日光を狹んで寫す場合が、よく戸外集合などで遭遇する事ですが是れは甚だ以て面白くないものです。

斯樣な場合の種板は、得てカブリ易いものでありまして、隨つて肉乘りが至つて宜敷くないものです。

斯る時には私は、苦肉の策として現像液第一液の量五割方濃厚と

なし、又全體の液量を指定量位の濃厚なるものを以てし、之に臭素加里を適宜に滴下し、則ちコントラストを强からしむるを目的として處理するのであります。

斯くしても尙肉乘り思はしからざる節は、今迄使用の現像液をバットより棄て去り、直ちに清水にて洗滌し、再び新なる前處方の現像液にて現像を繼續する時は、大抵所要の濃度を得られるものであります。

尙今申し上げたる所法での現像を中途にて止め一旦乾燥後、補力法を行ふのも、カブリを除く方法としては、別個の好手段とも信じて居ります。

却說、現像法に就ては思はず紙面を費やしましたが、現像法中最も必要なものは、申す迄もなく現像主藥であります。

處で、此現像主藥には、隨分種類も少くない樣ですが、私共專門家は沒色酸より良好と認むるものが、外には無いと信じて居りますが、殆んど是を用ゐて居る樣です。

此の沒色酸の味ひと云ふものは又格別なものでありまして、就中グラデーションを整え得る事と原板膜を傷はない事などは、到底他の現像藥と同比較にはなりません。

私は今後素人諸君にも、此の現像藥御使用を推薦して止まないのであります。

私は思ふ、素人達の寫眞が、專門家の夫れと甚だ敷懸隔のあるのは一は現像藥の撰擇に原因するにはあらざるやを、常に思ふて居るのであります。

沒色酸現像藥は前述の如く藥液調合上、物に應じ曝度に應じ、光線の强弱に應じて色々コントロールが出來ますからして、隨つて處理中面白味もあり自然良いものも出來ると云ふ事になります。

處で、斯く結構なる沒色現像が素人間に行はれないのは如何なる理由かと申しますると、第一は指頭を汚染する事と、第二は貯藏するに永持せぬ事とにある樣です。

先づ斯んな譯の樣でありますが、第二の貯藏の點は沒色酸を始め

より溶解する事をせず、使用の都度粉末を匙にて加入する處法にさへすれば、永久に保存され得るので一向不便な事はありません。

又第一の指の汚染に至つては、ホンの一寸の手數を惜しみさへせねば少しも指頭を染むる患ひはないのであります。

私は常に此法に依つて何時も綺麗に致して居ります。

先づ現像を仕舞ふたならば、最初に過滿俺酸加里の溶液(適宜によろし)に指を浸し、能く塗り附けて其手を一旦火に焙りて乾かす。(此時指の眞黑になるに驚く勿れ)而して此度は蓚酸加里の溶液(適宜でよい)中に浸して指と指にて互に擦り合へば、見る〳〵中に黑色は除かれて以前に優る實に綺麗な指となり汚染は少しも殘りません。

專門寫眞家の内には、猿の樣な穢らしい爪を爲して、遠慮會釋なく寫客の顏や衣服を取扱ふ人がある樣ですが甚だ以て宜敷ない。何卒此法に依つて美しき指の人となつて貰つたならば、お客の感情も能くし自然營業繁昌の基ともなれば勉めて怠りなき樣御注意致す次第であります。

背景に就いて

寫眞室と室内と戸外撮影とを論ぜず、人像撮影に於て背景を撰むと云ふ事は、至極大切なものであります。

申す迄もなく背景なるものは、主眼であるべき人物其者を引き立

たせるものゝ謂つてもよし、又は間の抜けたる空間を充塡する補ひ或はアシライとして利用する性質のものであります。

背景若し當を得ましたならば、假令半身像に用ふる無地のバックにしてからが、人物其物を引き立せるこゝ、實に非常なものであります。

譬へば茲に日本特有の美術こまで讃えられてある丸髷島田の美しさも、若しバックに純黑の者を用ひたゝしたならば、果してゞんな結果に終るであらうか、何處迄が鬢か、髷か、其輪廓さへ見極めの附かぬ、暗中飛躍的、西洋魔術の其れの如き無茶苦茶なものが出來上るでありませう。

斯樣な思慮なき寫眞を遺憾ながら數々見せ附けられる事があるのです。

或は顏こ同じ色合の濃さになる背景を使つたならば、第一顏の輪廓こ背景この境界が附かないで、恰も空間に目こ口こ鼻が散在してる樣なものが出來上るであらう。

又顏の色より白く感ずるバックを使用したならば、比較上顏を黑く見せる爲め、可惜黃色人種をして印度人たらしむる奇觀を呈する事になるであらう。

要は陽部に對しても其當を得、又陰影部に對しても其當を失はないこ云ふ、至極恰好の色合をバックに利用したいものであります。

現今は大分廢り氣味になりましたが、彼の雲の半身バックは此の目的によつて作られて居るものでありますが、私は始めより餘り好まない方でありました。其れはあまりに業とらしい嫌ひがありますと、調子の甚だしいのになりますと、あまりケバ〳〵しくて何となく野卑に見へまして、高尚優雅と云ふ點が害はれる樣に思はれるからであります。

斯樣な鹽梅に無地の半身バックでさへ斯程の影響を及ぼすものとしたならば、專門家の用ふる畫割或は室内或は外景等に至つては其關係の大なる事首肯するに難くはないのであります。

然るに世間多數の專門家と云はず、素人寫眞家と云はず、此のバッ

クなるものに對する注意に至つては、殆んどゼロと云つても差支ない有樣であります。

專門家の多くはバックなるものは單に形式的に、漫然空使してゐる樣に思はれます。

斯るが故に前述の如く、バック本來の目的と云ふものが認められて居らぬから結果はまるで滅茶苦茶であります。

本來、人物其物を引立つべき役目のバックが、却つて人物中最も主要とする顏の注意を殺いで了つたり、邪魔となつて見たり、空間のバランスを保つべき奴が却つて破壞の御手傳ひをして見たり、イヤハヤ御役に立つよりか寧ろ邪魔になる方が多いやうに見受けてなり

ません。

一二の例を擧げて見ませうなら。

戸外撮影の時に光輝燦然たる木葉を背景にする等は甚だ以て宜敷ありません。何故こなれば、斯かる賑やかなるゴチャ〳〵した、テカ〳〵したものは、主要物たる顏の注意を打ち破つて仕舞ふからであります。

ツマリ顏其物よりも、一番眞先きに眼の注意が、ギラ〳〵した背景の木葉に行きまして、肝心の顏を見るに非常な妨害こなります。

落ち着いて注意が其れに行き難いものでありますから、日光の當つた木葉に限らず、總べてゴチャ〳〵した強い感覺を與ふるものは

背景こして避けねばなりません。

殊に顏面に當る處は最も注意すべきであります。

其れから顏面に當る處に竪なり横なりの線を置くのは決しに宜敷ありません。

竪の線は磔柱の感を與へ横の線は串ざしにでもした感じがするので到底良い氣持を與ふるものでなく、第一目障りになつて宜敷ありません。

一は柱の眞前に立つこか一は物干し竿にて顏又は首の邊りを横斷してるやうなのが其れであります。

其れから先程バランスこ云ふ事を申しましたが、之も大いに注意

すべき事だと思ひます。

例へば茲に一人の立像を寫しますとして、位置の取り方に依つては彼の九代目團十郎が少さな身體一つで歌舞伎の大舞臺一杯になつて、寸分の隙を見せなかつたと云ふ樣に、間の抜けた空間を殘すやうな事もありますまいが、皆が皆そう云ふ譯には參りません。何處か間の抜けた處が出來るものでありますから、左樣の場合には、是非共空間を補ふ可き背景の必要を認めるのであります。

而して其空間なるものも、一個所と云ふ譯でなく、二箇所も三箇所にも出來る事があります。

一は比較的大なる空き間であり、他は小さな空間である、然らば大

なる空き間には大なる充塡物が要り、小なる空き間には小なる充塡物を要します。

然るに、世には往々大なる空き間に以て行つて、小さな物を當てがい、小さな空間に以つて行つて大きな物をアシラウと云ふ樣な、矛盾な行り方をして居るのを能く見受くる。

是れが即ちバランスを敗つたものであります。

斯樣なる仕方は物の重心を危くし、人の氣持を不安定にするからして、どこでも安心して見て居られるものではありません。

一例を擧げて見ますと、茲に新郎新婦の合寫があると假定致します。

光線は被寫體の左方から射入して居る。花嫁さんは向つて左方に腰を掛けて御座る。向つて右方に花聟さんが立つて居られる。然るに花嫁さんの方には窓があつて、大れに派手やかな窓掛けが取付けられて、窓腰の棚には今を盛りの花を盛つた花瓶が置いてある。夫れに窓の硝子がステインドグラス式で、隨分込み入つた造り方であつて、如何にも凡てが賑かに畫かれてある。夫れに引き換へ花聟さんの方はこ見るこ、何にもない只の黒壁のみである。

で、此の寫眞に就て考へて見ましたならば、是れこそ所謂バランスを極端に破つたものこ云つて宜しいのであります。

假りに此の寫眞を縱に半折したこして見ますれば、左方花嫁さん

の方は、背景こ云ひ、花嫁さんの髮飾服裝こ云ひ、實に絢爛眼を奪ふ許りの賑はしさ華かさであります。

夫れに引換へ右方の半分を見まするこ、背景は何一つないじみな黑壁こ、黑一點張りで如何にも淋しい服裝のお聟さんの立姿である。

何んこ片寄りの配合ではありませんか。

左方は重く、繁く、賑はしく、右方は如何にも輕く、寂しいではありませんか、

夫れのみではない。折角花こ裝へる花嫁さんの服裝も、是ではメッチャ〳〵であります。

なぜならば、彼の文金島田に挿まれたる雲こ紛ふ花笄も、可惜、バッ

ク窓上花瓶の花と混同してメツチヤ〳〵となり、美裝術師が精を凝して結び上げし孔雀ソツチノケの錦欄の帶も、振袖も、裾模樣も、終に華麗なるバックの賑はさと混淆錯雜して、孰れが着物かバックか見極め付かぬと云ふ事になつて、折角の美裝もトウ〳〵ダイなしにして仕舞ふ事になるのであります。

之れと同時に花聟さんの方は單に黒着物と黒壁のバックですから其經界さへ見極め難く、殊に袴の部分などは暗黒の狀態に陷り、實に寂々凉々たる慘めな有樣を現出するのであります。

そこで此の人物を今迄と反對に置くとしたならば茲に始めてバランスが取れる事になつて結構に見られ得る寫眞となります。

そは淋し且つ單調である新郎の方は賑かなるバックに依つて其簡單は補はれる事となり、華麗なる新婦の方は背景の單調に依つて却つて眞の美しさが發揮され、茲に始めて成畫上のバランスが彩れると云ふ事になるのであります。

又バックの色合に對する人物との照應も大に注意すべきだと思ひます。

黒地に黒服、白地に白服は人物を引立たせ難いものであり、陽部にバックの白い處を當嵌めたり、影部にバックの黒い處を持つて行くと云ふ樣な事は、人物と背景の間隔を現はすに於て、甚敷邪魔になるものでありますから、大に注意すべきであります。

又寫眞畫として美術上の見地から明暗の配合と謂ふ事にも大に考ふ可き事だと思ひます。

夫れから私は人物と背景との間に空氣の充實と云ふ事を常に念頭に掛けて居るのであります。

夫れは、半身像のバックにせよ、或は室内風景及び自然の背景にもせよ常に空氣に圍繞されて居る所謂遠近觀の充當せる寫眞に接する程見厭きの爲ない者はありません。

如何に外の仕事は手綺麗に出來て居り、上手に作り上げてあつても、空氣のない遠近觀の缺乏した寫眞を見た時に、一寸は噫美しいとは思ふものゝ、暫時すると、もう、すぐと厭になるものです。

勿論、此の空氣充實、遠近觀を全からしむるには、光線の採り方、レンズの扱ひ方、現像の仕方乃至燒付け仕上方と夫々關聯する處は廣く殆んど寫眞術の全部に亘つて仕舞ひますが、就中、大切なのは暗いレンズを使はぬ事。明るいレンズにしてからが餘りに絞つて暗くしては矢張駄目である事。

第二に現像處理に於てグラデーションを可及的豐富ならしめ、同時に種板に黄色等の汚染を附せざる樣注意する事。

第三畫割背景と無地バックとを問はず、決して背景其物に直接に光線を當てざる事。即ち人物と背景との間には、薄き白布を透して十分緩和されたる、即ち蘊蓄されたる光線を透したる背景に向つて

撮影する事。

第四には餘りに背景畫をボカしてはならぬ。(從來背景はボカス程畫が浮いて見えるなどと唱えられて居たなれでも)私としては決して賛成が出來ませぬ。

勿論餘りに鮮明したる背景畫は宜敷ありませぬが、又餘りにボケた背景畫は却て異樣の感じを起さしめるものでありまして、殊に日光などの當つて居る木の葉などのボケたのはボコ〳〵して、恰も綿の固りか何かの樣で、非常に目障りになつて眼が廻りそうになるものです。

夫れよりか寧ろハッキリ「ピント」の合つてる方が寧ろその位眼が

安まるか知りませぬ。實際に當つても僅か許りの距離の處で、アンナにボケて見えるとの云ふ事はない筈であります。

第五印畫に當つてグラデーションに富む印畫紙を撰む事。先づザット斯樣な取扱ひをしましたならば必ず空氣に圍繞されたる豐富なる氣持の良い寫眞が得られる事と信じます。

閃光及電光撮影に就て

閃光撮影は近年非常に世間から嫌われて來たのである、某料理店某倶樂部、何々集會場孰れも閃光撮影御斷りと云ふ事になつて仕舞つたのであります。

夫れは如何なる理由かと申すに、閃光撮影の時、是迄毎度危險至極な事柄が瀕發したからなのであります。

茲に二三の實例を擧げますれば、或る結婚披露の席上閃光がデコレーションに燃え付き見る〳〵裡に會場一面の猛火となつたので今の今迄お人形然と濟まし切つて居た花聟さんが、イキナリ花嫁さんを抱えて戸外に飛び出したと云ふ、とんでもない喜劇否悲劇が演ぜられたと聞いて居る。又或る集會の席上で閃光粉の固まりが某代議士の禿頭の天邊に燒き付いて容易に取れなかつたと云ふ事も聞いて居る。

其外欄間を焦がす、柱も燒く、天井の壁を燻らす、カーテンを燒く、障

子に燃え遷る疊を焦がす、御馳走のお膳に遠慮會釋なく粉末を飛ばす、數え來れば際限はないので、是れでは世間から嫌われる樣になつたのも無理はないのであります。で、何故に斯樣なる失敗を來たすかと申するに是れは第一に寫眞師其ものゝ度胸が据つて居らぬからであります。度胸が据つて居てチヤンと落付いて居さへすれば、注意が周到に行くからして、決して斯樣な矢態を仕出かす事はないのであります。

そこで私は一寸專門家諸君に御注意して置きたい事があります。

私共が出張撮影に參りますと、行くが早いか、ソレ寫せ今寫せ、アノ演說か濟んではならぬ、アノ披露の辭の濟まぬ裡に、なごと非常に急

き立てらるゝ事が往々あるのです。斯樣な時にツイ釣込れて周章て樣ものなら、三脚に躓いたり、締む可き螺族を締めそこねたり、蓋せぬ前に取枠の引蓋を引いて見たり、甚敷のはレンズの蓋も取らない裡に閃光のゴムを押したりして、終には以前の樣な大失態を仕出かす樣な事にもなるからして、前陳の樣に無暗に仕事を急かれた場合には態と悠々落付を見せ、而して曰く、左樣に御急ぎになつても器機の組立や、足場の設備や、焦點を定むる事や、閃光器閃光粉の用意など少なくも十分の時間は是非共必要でありますが、夫れで宜しければ寫し、若し間に合はぬとあれば御免を蒙るとキッパリ最初に約束するのであります。

斯く言ふ私は常に之を實行して居るのであります。

而して悠々臍下丹田に心を落ち付かせ、然も頭を明晰に保ち、機敏に仕事を果す樣に致せば、決して失敗など致す事は斷じて無いのであります。

然し乍ら此の腹を据えると言ふ事は、言ふは易いが中々容易の者ではありません。

かるが故に、何とかして此の危險を防ぐ工風はないものか？ 或は曰わん撮影用のアーク燈を使用してはと、成程一應御尤だが初より各集會場料理店に設備してあれば無論結構であるが、左なくして一々運搬の上、其の都度取り付けると云ふ事は實際不可能でありま

す。

又六櫻社製の燦光器と云ふのではごうかと云ふに、未だ使用した事はないが、最光力が二千燭光と稱へて居る處から見ると、とても大集會の席上などに適するものではないらしい。そこで私は此危險を防ぎ閃光粉の飛散を防ぐには、包烟袋を巧に使用するより外、今の處他に良策はない樣に思はれるのであります。

是より私の使用しつゝある包烟袋の作り方と其の使用法とを御披露いたしませう。

包烟袋は市販のものを少し許り改良しました丈けでありまして夫れは市販のよりか包烟袋を倍も大きくするのであります。

左樣にしなければ市販のでは到底五十乃至百分グラムと云ふ大量の閃光粉烟は包まりません。此の包容量が十分でないと燃火と共に包烟袋が撥ね飛ばされて仕舞ひます。

而して市販のは、袋の布地が厚過ぎるから、其の爲に光力が非常に弱められますので、大集合の時は到底使用に堪えませんから、私は極めて薄きカナキンを使用して居ります。然し薄いのでは烟りが出ではせぬかと慮る人もありませうが、使用の時には布に十分水を吹き掛けるので、水の爲に布目が塞がつて居りますから、出ることはありません。多少は出るかも知りませんが、少々許り出たからと云ふて少しも差支はないのであります。

夫れから袋の天井に當る處丈けは成可く厚い布の方が宜しいのであります。ごうしても火力は上の方が一番強いのですから、水を吹き掛けては置くものゝ、度々使用する内には燒け貫ける恐れがあるから、厚い布に限ります。（上部の方は別に光線の必要がありませんから）。又袋を始より水に浸して絞る人もある樣ですが、之れは枠に嵌める時にベタ〳〵して非常に嵌め惡いものでありますから、最初枠に嵌めて置いて口にて十分水を吹き掛ける方がよろしいのであります。

而して愈々撮影と云ふ時に、布の一端を紮げ閃光粉を盛りたる閃光器を取付けるがよろしいのであります。早く取付けて置くと閃

光粉が布の水分を呼んで濕氣を帶び燃へ惡くなる恐れがあります。

尙ほ袋の下部は紐にて縛ばり、其上を手に確かと握り、發火の際袋も臺も撥ね飛ばさぬ樣注意すべきであります。

尙ほ閃光器のゴム紐は、袋の一部に適當の穴を開けて置くが宜敷いです（少々烟は出るが差支はない）。

さて此の器械を使用するならば決して火焰の爲に外物を燒く患もなく、粉末を散らす恐れもなく、又厭ふ可き烟りを滿す不快も無く凡ての障害を一掃し得る事になるのであります。のみならず此の包烟袋を使用すれば幾回にても續けざまに撮影される便宜があります。

さもないと第二回目の時は第一回の烟りが室外に放散するのを待たなければならぬ。これは少なからぬ時間を要するのでありまして急場の間に逢はぬ事があつて困るものです。又冬期は放烟の爲に各所の窓を開放すると、寒風が遠慮なく吹込んで來て甚だ以て不都合であります。

此度は外物に危險を及ぼすのでなく、技師自身の危險を防ぐと云ふ事に就ての注意を申述べませう。

閃光粉取扱中に爆發して不慮の火傷を蒙つた人が私の知つた人にも少なくないのであります。

或人の如きは閃光粉製造中卷煙草から原因を起したのだが、分量

が多かつたので非常な火傷を爲し、顏は丸で化物の樣になり、兩手共メチヤ〳〵に引き攣り、指は屈みて自由を失ひ、生れも付かぬ不具になられて居る。今一人は是程でもないが同じく大火傷で、是又製造中閃光粉中に砂が混じて居た爲め、取扱中發火したものであるが、矢張顏及兩手共引き痙りが出來て、若い身でありながら、丸で七八十の老人の樣な手になつて居られる。

右の人々は製造中であつたので、火傷が酷かつたのであるが、普通撮影の場合に取扱ふものは多くて五十グラムか百グラム位のものであるからして、斯れ程の大火傷はあるまいが、夫れにしても後日傷こそ殘らないにしても當座は先づ頭はお釋迦樣の樣になり、眉毛も

無くなれば大事な鬢も無くなつて仕舞ひ、顏と手の皮はベロ〳〵に剝けて、矢張一時は丸で化物の樣になり、醫者に罹つて顏も手も指も繃帶で包まれ、先づ十五日乃至二十日間は全く兩手の自由を失ひ、食事から便所まで一切人手を借りねばならぬ。夫れには勢ひ看護婦が差當り必要で、醫者に罹るや何かで少からぬ費用を要する。仕事は當分出來ないし、傷が癒つても顏付が半歲位は丸で癩病患者と疑はれる位だから、知らぬ人の前にはとても出られたものではない。

斯樣な酷い目に逢ふのも、只一寸の不注意からであるを思ふたならば、お互に今後共大に注意すべきであらうと思ふのであります。

處で、尙ほ御注意して置きたいのは、閃光粉の爆發は、穴勝、煙草とか

小石の打擊より生ずる發火とか〻原因となる許りでなく、絕對に火の氣のない場合と雖も、往々爆發すると云ふ事を忘れてはならぬ。

全然火氣なくして如何にして爆發するかと云ふに閃光粉が濕氣を帶びる時は、自ら熱を起し終に爆發するのであります。

私は此の失敗に就て、恰度二度の經驗を以つて居ります。一は小雨の降る梅雨の夜るでしたが、某倶樂部で十四五人の集合を撮影せんとしたが、カンシヤク玉が發火しなかつた爲に、一旦閃光粉を閃光器から取り出し、新聞紙の上に遷し置き、カンシヤク玉の取換を爲し再び新聞紙上の閃光粉を閃光器に盛らんとて、之を取上げんとする際爆發したのであります。

一は出張せんとするに當り閃光粉の兩藥を新聞紙上にて混和しつゝある際に爆發したのでありました。尤も此時も二日續きの雨降りの日でありました。而して二回共爆發する前には閃光粉に熱氣を覺へたのであります。

（閃光粉が濕氣を帶びたのは雨天の爲空氣中の水分を引いたのと一は新聞紙の濕氣を吸收したのでありませう。）依つて此事を某學者に問ひました處、閃光粉が濕氣を帶ぶ時は漸次に熱を生じ終に爆發するものであると云ふ事を確めた次第でありました。

是れに就き私の少々腑に落ちないのは、前に申しました包烟裝置をして撮影する時、撮影の都合で手間取つた時に、閃光粉が布の水分

を吸ひ込んだ爲に發火を鈍らしたことが度々ありましたが、一回として爆發した事が無いのであります。そこで是れは素人の考へでありますけれども、私の考へでは假令閃光粉が濕氣を帶びたとしても金屬板や陶器の樣な不燃性のものゝ上に置かれてある時は、發火しないものではなからうかと思ふのであります。

ごうも私の考へでは、新聞紙と云ふ奴が曲者の樣に思はれてなりませぬ。夫れは閃光粉が濕氣を帶び自然に熱を起し夫れが愈々熱度を高めて來た時に、新聞紙の活字に揮發性の油氣のある處からして、是れが發火の動機に成りはせぬかと思ふのであります。此事は無論無學の私が斷定さる可き事ではありませんので、玆に記して諸

賢の御參考に供する次第であります。

扨て危險防止に就ての御話は此位に致しまして尙二三の注意を記して置きませう。

大集會の席上七十グラム乃至百グラムなどの大量を用ゆる際は閃光粉を盛上げる事をせずして、成る可く平面に布置する樣にした方が閃光粉の全量を無駄無しに燃し得る事になります。

ごうも盛上げたのでは、燃火の際の勢ひにて下層にあるものは燃えない內に撥ね飛ばされる氣味がある樣に思はれます。

夫れから閃光粉をカンシャク玉の上に覆せて盛る人があるが、あれはごうかするこ發火の防げこなる事がありますから、覆せないで

カンシャク玉ごスレ〳〵位に布置した方が確であります。

夫れからごうかするこ癇癪玉が發火しない事があつて大いにマゴツク事がありますが、あれは癇癪玉が濕氣を帶びて居る時か或は閃光器の打針こ打盤この掃除が行屆いていない爲に以前使つた閃光粉の燃滓がコビリ附いたりして居るので、發火の防げを爲すのであり、夫れに癇癪玉の置き方が中心に行かずして外れて居る場合にも發火しない事があります。そこで此等の事を注意さへすれば閃光撮影は敢へて六ケしいものでもなく、又取扱に細心の注意を沈著の落付きさへあれば決して危險なものでもありませんから、俺は閃光撮影は危險だから一切御斷りだなどゝ弱蟲な事を言はないで、ド

シ〳〵と我を信賴する人々の爲には滿足を與へた方がよろしいでせう。畢竟閃光撮影は是れに勝る良好なる人工光の發見されざる限りは、無二の寶として吾人は大に感謝を拂ふ可きだと思ふのであります。

序ながら夜間撮影用のアーク燈と、電球燈との事を一寸申添へませう。

寫眞室の夜間撮影用としては、閃光撮影よりもアーク燈か電球燈撮影の方が優つて居ると信じます。

閃光撮影の大缺點とする處は、第一瞬きにあります。次はアーク燈や電球燈撮影に比し手數が掛つていけません。夫れから續いて

撮影するに烟の所置に困難であります。(假令包烟袋或は烟抜きの裝置がしてあつたとしても)。夫れからアーク燈と電球燈との比較はどんなものかと云ふに、私は從來アーク燈の方を使用して居りますので、電球の方は實驗は致しませんが、アーク燈の長所とする處は取扱に危險が無い事と自由自在に操縱される事と、場所を塞がぬ事位な處でせう。(夏期不用の節は取外して仕舞つて置けます)。短處としては光が常に呼吸する事であります。換言すれば明くなつたり暗くなつたり、或は青味勝となつたり、黃味勝となつたりするので曝度が中々六ケしいのであります。夫れにカーボンが燃えて行くので常に炭素棒を近づける手數が頗る面倒です。

電球の方であるこ、こんな憂は殆んごなく、常に同一の光力を保つて居りますので、露出には非常に樂であります。只私はごうも、球を取付けてある臺を取扱中或は掃除なごの時に倒して壞しはせぬかこ、夫れが心配でなりません。尤も頑丈な臺を備へてあれば危險もありますまいが、そうすれば、自然容積が大きくなりますので、邪魔になつていけません。（電球撮影專門の人なれば差支もあるまいけれごも）夫れに電球の方は光力の生命に限りがあるそうですから、時々球を取換える費用が掛ります。然しアーク燈の方であつても炭素棒が費えて行くので、費用の點は執れが多く掛るかまだ比較した事はありません。

尙アーク燈は反射光にはなつて居りますけれごも、其まゝでは光りが强過ぎますので、私は寒冷紗のスクリーンを以て、尙光を分散させて使つて居ります。而して陰影部に當る方には、白布を張つたる縱八尺巾六尺の大反射屏風にて反射光を採つて居ります。

プロマイド引伸に就て

寫眞術中プロマイドの仕事ほご、嚴格なものはないのであります。そは引伸に使用する原板に對する光線の强弱に就ても、現像液の調合に就いても、露出に就ても、現像に就ても、取扱上の寬容範圍が極めて狹隘であるから、仕事が非常に六ケ敷いのであります。

先づ第一は原板に對する光線の強弱であるが、是は引伸仕事中中々大切なものでありまして、若此の出發點を誤まつたならば、以後の仕事を如何に巧みに行つたとしても到底良好なものは得られないのであります。

譬へば肉乘りの乏しい淡目の原板の時に、強烈なる光線を用ゐたとしたならば、其の結果はごんなものになるでせうか。

申す迄もなく其結果はメチャメチャの一言で足りるのであります。乏しいながらも其原板が保つて居る大切なるグラデーションも、肉乘りも、全然掻き亂だされて、薄つぺらなフラットな、カブツタ惡講が出來るのであります。

之れに反して濃厚過る原板の場合に、微弱なる光線を用ゐたとしたならば如何でせう、其結果は是又ドギツキ惡寫眞が出來るのであります。

或は曰はん、左樣な場合には長時間の露出さへ行ふたならば好結果が得らるゝであろふと。

否々一應は尤の樣ではあるが、原板の濃度と光線との比較が餘りに甚敷懸隔ある場合は、いくら長時間の露出を行つたからと言ふて透さぬものは何處迄行つても、光線が其の濃部を透す丈けの力がないのであります。

只透すのは半調部の一部と、陰影部丈で殊に最陰影部にはドシド

シ透すのであるからして、其結果はドギツクなる一點張りであります。（但し臭素紙は他の印畫紙の如く燒けば燒くだけ濃度を增すものではなく一定の濃度に達すれば其先の露出は却つて濃厚を減殺する樣になるものであります）。

ソコで要するに淡い原板の時でも、濃い原板の時でも、チヤント原板に適合する光線の强さと云ふものがあるからして、其工合を會得する事が肝要であります。

夫れを會得するにはどうすれば良いかと申せば、光線が原板を透して假寫板に映寫された時、判然と良い調子の畫に寫つて居れば良いのであります。（ツマリ其の通りが寫るのであるからして、）

で、前陳の如き淡い原板で强い光線の時には、假寫板に映寫されたものが眼口鼻さへ判然とせずして、只バアツトして薄つぼく、眼がキラ〳〵として落付いて、見て居られないと云ふ樣な寫り方をするのであるから、左樣な節は眼口鼻も判然と見え、調子も濃くなり、氣持よく見られる樣な處まで光線を弱わめるが宜しいのです。

光線を弱めるには、原板の外に目の緻密なる曇り硝子か紙を以て掩ふのであります。

又絞りを小さくしたら宜かろうと云ふ說もあろうが絞りを小さくすると畫の調子が平板な地圖的になつて、圓味と温和な調子を失ふから宜敷ありません。（別問題ではあるが全面にピントの合ふ迄

は絞を小さくするのは止を得ないのである假令幾分畫の調子を害ふこも。

第二には現像液の調合でありますが、是れは現像液と各種の臭素紙との調子を合せるのでありまして、最初現像に取掛る前、使用せんとする臭素紙の一片を取り、使用せんとする現像液の中に約一分間投入して、臭素紙にカブリを來すや否やを試驗するのであります。

カブリの有無は臭素紙の膜面と裏面とを赤色燈の明りにて比較すればカブリ無き時は表裏の色合相同じく、若カブリを來す時は膜面の方は黑ズンで來るから、すぐに判ります。

若し一分間内にカブリを來したならば、臭素加里一割液を現像液

中に適宜に滴下して、臭素紙が全くカブリを來さゞる樣になつたら安心して其現像液を使用する事を得るのであります。

なぜならば斯くして調子を合せたる現像液を用ゆれば畫にカブリを來す憂ひがありませんから。

之に反して若調子を合する事をしなかつたならば、假令外の仕事に落度がなかつたとしても、必ずカブリある不鮮明な、濁つた寫眞となるのであります。

尙御注意致しますのは如何にカブリは防止されたとしても、餘り過分の臭素加里を加入致しますと寫眞の色合が惡くなるばかりでなく、畫調がドギツクなつていけません。一體臭素紙寫眞の色合は

ごんなのが本當かと申しますと私は純黑色が良いと思ひます。

然るに臭素液の過分なのは帶青黑色となつて仕舞ひまして餘り感心した色ではありません。

又後にセピヤ調及綠色調赤色調に致しますにも純黑色に出來たものゝ方が結果が良いのであります。

斯樣な譯でありますから、臭素液は餘程鄭重に取扱ひ、先づ小心翼々と云ふ風に、一滴々々を注意して此處まで來たらカブラヌと云ふ極度を過さぬ樣にありたいものと思ひます。

尙現像液三オンスに對して、臭素液(一割液)十滴を滴下しても尙カブリあるものは臭素紙が腐敗したのであると云ふ事です。

第三には露出でありますが、臭素紙は始めに申しました通り凡ての仕事が嚴格であつて此位はよかろうだの、後でごうにかなるだろうなど云ふ樣な悠長な事は斷じて許さないので、是れが人であるとしたならば頑固一點張りで、情も容赦もない質の人間であります。

さて露出の最も大切なる事は、撮影の露出に於ても、印畫紙の露出に於ても同樣でありますが、其の中でも引伸露出は殊に大切なものであります。

如何とならば撮影の露出も、印畫の露出も、其露出に假令多少の過不足があつたとしても、後の仕事に依つて可なりの補修が出來得るものでありますが、此の臭素紙に至つては絕對とは言わないが先づ

殆んど養生相叶わずであります。例へば臭素紙現像の時先づ現像液を注いだとする、然るに露出過度であると、液を注ぐや畫像が一齊にパット現われて仕舞ふ、是れが乾板の方であると、手早く現像液を棄て去り水を濺いで水中に浸し置き更らに適當の所法に依る現像液にて再び現像を繼續して、應分の修正が得られると云ふ事になるが殘念ながら臭素紙では夫れが叶わないのであります。

なぜと申すに臭素紙は至つて氣短であつて、乾板に於ける樣な手數を行つてる内が待ち切れないので、水の中であろうと何んであらうと、お構ひなしにずん〳〵と現像を進行させるし、第一地色を汚して、ガブリが來て、寫眞の色が狐色になつて仕舞ふのであります。

又露出不足の時はどうかと申すと、現像液を掛けると陰影部の處だけは出るけれども、半調部や陽明部の處は中々出て來ない、そこで現像液の調合でも仕直して行ろうとしても、過露出の時と同樣に其の間がとても待ち切れないで、ズン〳〵、ガブッて地色を汚して仕舞ふのであります。要するに臭素紙の現像は、乾板の現像と異つて現像時間に制限があるので困るのです。其時間は大低現像液を掛けてから僅か三分間以内とされてある、若し其の時間を過ぎれば無論カブリを來すのであります。

ツマリ現像時間が餘り短かいので、どうする際もないのである。ニベもシヤクリも取付く際がないのである。誠に早や愛嬌の無い

ブツキラ棒なブロマイドさんであるんであります。

斯樣な譯でありますから、臭素紙の時には各種の原板に應じて露出時間の正鴻を得ると云ふ事に熟達せなければなりません。

第四には現像でありますが、臭素紙は前に縷々と申しました通り原板に對する光線の鹽梅、第二に臭素液と臭素紙との調子の合せ方第三に露出と、此の三ッが巧く行つて除けられたとしたならば、現像は比較的容易なものであつて、ツマリ現像の適度さへ見れば、良いと云ふ丈けの事であります。

で此臭素紙と云ふものは、他の印畫紙と違ひまして、大體に於て其の畫調としては、先づ深味の乏しいものとしてあります。

夫れも第一に原板が良くて、前述の三拍子が揃つて巧く行つたものであれば隨分グラデーションに富む深味のあるものが出來ない事もありませんが、臭素紙は他の印畫紙と違ひ燒き込めば燒込む丈け濃くなると云ふのでなく、或一定度より外濃くならないのみか、過ぎれば却つて淡くなると云ふ性質の紙であるのが、淺いとさるゝ原因の主なるものであらうと思ひます。そこで此の印畫紙に對しては、大體に於て深みを持たせると云ふ目的を以つて行きたいのであります。

左樣に致しますには、第一に現像液の濃厚と云ふ事は最も重要なる條件の一つであると信ずるのであります。

夫れと同時に臭素紙を現像前に水に浸すと云ふ事の不可である事を揚言するのであります。（無論或る殊別の場合は此の限りにあらずとして）。

如何とならば濃き現像液は畫調の照應を強からしむる働きを以つて居るのでありますからして、自然グラデーションを豐富ならしむる事になり隨つて畫の深みを增すと云ふ理屈になるので、臭素紙の落ち入り易い淺薄と云ふ缺點を防ぐ事になるのであります。

第二の現像前に水に浸すと云ふ事の不可なる理由は第一の意味と同じであつて、ツマリ水に浸すのは現像液を淡くすると云ふ事になるので、若斯樣の取扱をしたならば、夫れこそ深みのない、フラット

な弱々しい、灰白色な、更に活氣の無い實に死んだ樣な、情ない寫眞になります。

多く見る臭素紙引伸畫には、斯樣なのがザラにあつて、寧ろ斯樣なのが當り前であるかの樣に、世間では思つて居る樣にも見えるが、實に間違つた話しであります。

そこで臭素紙引伸畫を良く作らんと思ふならば、第一に引伸に適する原板を作ると云ふ事が最も大切であつて、ツマリ肉乘りの良いグラデーションに富んだ、厚手の調子の原板が良いのであります。

次には其原板に適合する光線の强さを見極める事、其次には臭素紙と現像液の調子を合致させる事、其次には適度の露出を與ふる事

其次には適度の現像をなす事、若し此の注意を以つて其の處理を誤らなかつたならば、プロマイド引伸であつても他の良好なる印畫紙に對して、決して遜色なき良好なる、寫眞が得られ得る事を堅く信ずるのであります。

抑も此の臭素紙引伸印畫なるものは、實は寫眞術中に於て最も敬意を拂ふに足る、有難い寫眞であると私は常に思ふて居るのであります。

如何となれば若我寫眞術中に於て、此の引伸寫眞を失ふたとしたならば果してどんなものでありませうか。

第一大形寫眞を作らんとするに、徒らに多大の費用を要するのみ

ならず、其手數に至つてや實に容易なものではありません。隨つて寫眞の大きさは、主に四ッ切を最大限度とする樣になつて自然寫眞てふものは、豆の樣な、見映えのしない、至極淋しいものになつて仕舞ふのであります。

殊に此節の樣に素人寫眞家が、豆寫眞から好適の寫眞を得るなどの調法至極な恩惠は、皆無得られぬ事になるのです。私は思ふ、かく重寶至極な引伸法と云ふものが存在する以上は、今後大いに此の技術に熟達して、良好なる引伸畫を製出し、今迄の樣なチッポケな玩具見た樣なもの許りに滿足せず、展覽會などにはドシ〳〵大作品を出品して、宜しく雄大なる風景畫なり、活躍たる人物畫なり、を兎に角大

きく見せる事にしたいのであります。

實際今迄の寫眞展覽會の樣に薄暗い處に豆の樣な然も陰氣至極なもの許り並べて居た分には、面到臭くてとても延々した氣持で、落付いて見る氣にはなれないのである。

どうせ一般に寫眞趣味を普及させ樣と思ふならば、他の繪畫展覽會の樣に、晴々しく何んでも大きく見せる樣にするのが肝要である。

さすれば寫眞趣味のないものでもッヒ見る氣にもなつて、ッヒ夫れから寫眞好きになる樣な事にもなると云ふ譯であります。

引伸術の幼稚な時代からの因襲として、どうも引伸寫眞と云ふと一寸馬鹿にする傾向がありますが、夫れは前にも申した通り引伸術

は技術上のラチチユードが狹隘であるからして隨て仕事が六ケ敷い爲めに、良いものが作り得ないのが斯く不評判の因となつて居る樣でして、今から思へば引伸寫眞こそ迷惑至極な譯であります。

實際今日では美術上の見地からしても原板密着燒付のものよりか引伸寫眞の方が一種の味を以て居るのであります。

密着印畫は餘りに微細に寫り過ぎると云ふ嫌ひがあり、夫れかと云ふて態とピントをボカして寫したのでは厭味な處があり、又近來流行のウエリトよりする印畫も決して惡くは無いがどうも何となくダブルラインがある樣で、私は目が廻つて氣持ち良く見る事が出來ぬのであります。

左樣な譯で、若し引伸法を巧みに取扱つて、寫眞畫の目的に適合する臭素紙の紙質と調色法の色合とを誤らなかつたならば、實際美術的の作品を作るに於て、彼のゴム又はオイルの夫れと左程軒輊なき作品を出すに困難ではない事を信するのであります。

又多大の手數を要するゴム寫眞や、オイルプリントの夫れに比して、簡易に所理され得ると云ふ事も、棄てがたき特長とせねばなりません。

尙終りに臨みまして、臭素紙に關する注意す可き諸點を記述して置きませう。

(1) 臭素紙印畫に黑線の出るのは最初紙斷の時或は其他取扱中に

印畫紙の角又は鋭利なるものにて磨擦したる時に生じ易きものであります。又黑點の生ずるのは主に鐵錆より生ずるものなれば、紙斷の時に刄物を使用せぬ方が安全であります。

(2) 臭素紙には迅速度と普通度とがあるから、濃い原板の時には迅速度を用ひ、淡い原板の時には普通度の方を選べば、仕事が行り良く出來榮へも其の方がよろしいです。

(3) 現像液には私はメトールハイドロを使つて、居りますが、別に差支はありません。然しメトールは陽部を汚す恐れがあると云ふ說もありますから、一寸御參考迄に申上げて置きます。

(4) 臭素紙印畫に黃色のカブリを來たすのは左の諸因でありま

す。

(1) 現像液中にハイポウの混入せる時。(2) 一度使つた現像液或は調合してから長時間を經たものを使つた場合。(3) 現像時間の長かつた時。(4) セピヤ調色の時漂白液の水洗が足らなかつた時。(5) 古いハイポーを使つた時。(6) ハイポー定着の不十分であつた時。

尙凡ての印畫紙には清淨潔白と云ふ事が大切でありますが、臭素紙引伸には殊に大切であります、陽明部に黃色其他のカブリを來さゞる樣細心の注意が願はしう思ひます。

(5) 夏期には臭素紙印畫にカヘル膚が出來る事がありますが、之を

防ぐには酸性定着液を使へばよいと云ふ說もあるが、私はハイポー引揚後水洗中に適宜の食鹽を混入致しますが効果がある樣です。

又カヘル膚を治するには、アルコールと水と等量にしたものゝ中に浸すか或ひはフォルマリン液中に浸せば容易に治療し得るものです。

復寫に就て

復寫と云ふ仕事は私共專門家としては、餘り有り難くないものとされてある樣に思はれます。

夫れは直接に人物を寫すのよりか、面白味のない事と、一つは、一寸

特別の手數を要する面倒があるからでありませう。然し乍ら一度眞面目の心を以て考へて見たならば、復寫なるものは、私共が實は襟を正し愼重の態度を以て製作すべきものが、多數を占めて居ると云ふ事に思ひ到るのであります。

そは吾人の取扱ふ復寫の大部分は已に世に無き故人の面影であつて、是を依賴する人々に取つては、實に崇敬措く能はざる無二の貴重品であるからであります。

嗚呼世に居ます時は朝夕起臥を共にしたる最愛の人々も、一朝幽冥處を異にすれば、見るに影なく聞くに聲なく何一物も殘るものはないのであります。

噫、せめては肖顔なりとも、希ふは人間の至情であつて、昔は之を繪に畫かせ幾分の似顔に依つて慰さめとしたのであつたが、今や寫眞と云ふ有りの儘なる面影に接する事を得、見る度毎に在りし日の事ども思ひ出られ、暫時なりとも、心其處に至るを得ると云ふのは、實に我寫眞の恩惠であります。

此の寫眞はやがて位牌と共に靈前に安置され、朝夕家人の禮拜の的となるのであります。

思ふて茲に至れば、私共は決して此れを厄介視する事なく、特に細心の注意を拂つて、謹製すべきものであると思ふのであります。

扨て復寫の時の設備としては申すまでもなく、レンズを復寫すべ

き寫眞の中央に向はしめ又其の寫眞面と暗函の面板とは正しく平行を保たしむ可く、然らざる時は寫眞に歪みを來す憂ひがあつていけません。即ち上部の方が大きくなるとか、右の方が小さくなるとか、ツマリ原寫眞通りの正しさに寫らなくなるのであります。

夫れから特に注意すべきは寫眞面の反射であります。若し寫眞面に光線の反射があつたならば、到底鮮明なる復寫は得られ難いものであります。

其反射の有無を鑑定するには、最初暗函を寫眞に向はしむる前に技師其人が直接に寫眞に向ひ丁度己れの眼の位置をレンズを置くべき高さの處に置きて、寫眞に來る光線の反射の有無を見定めるの

が一番宜しいのであります。

斯樣の方法に依り眼をアチコチと遷して見て反射の來ない場所を定め、其處に暗函を置く樣にすればもう確であります。

然るを若此方法を採らずして、始めより暗函を覗いてゴロ〳〵と其の位置を換へてピントグラスで見極め樣としても中々面倒であり、又本當の見極めは容易に附くものではありません。

夫れから復寫の露出は中々六かしいものであつて、到底他の寫眞場人物撮影の比ではありません。

如何となれば復寫さるべき寫眞の性質が實に千態萬狀であるからであります。

早い話が、或ものは一二秒にて足るものもあるし、又或るものは四五十秒も掛けるこ云ふ鹽梅に、其の見定めが中々六かしいのであります。

私の見る多くの復寫は大抵露出の失敗が多いのを見受けるのであります。

世間では復寫こし云へば寫眞の性質も碌々見極めないで、絞りをウンこ絞つて曝度をウンこ掛く可きものゝ樣に思ふて居る人々がある樣に見受けるのでありますが、甚だ以つて其意を得ない次第であります。

此等因襲的の誤謬が只今の樣な失敗の原因こもなつて居はせぬ

かこ思ふのであります。

そこで露出の六かしいこ云ふ事に就て尙具體的に申しますこ彼の古い〳〵褪色したものや、青白色のブロマイドや、黑味勝のセピヤ調や、ドス黑いのや、フラットのや、カブツタのやボケタのやドギツイのや殆んご百枚あれば百色こ云ふ有樣なのであるから、是等に對する露出の取扱は中々以て容易の業ではないのであります。

又露出ばかりではない、此等の寫眞に對する光線の强弱に就いての調節こ絞の鹽梅に就ても是又多大の注意を拂ふ可き問題であります。

申すまでもなく淡き寫眞や青味勝の寫眞の時は成可く光線を弱

く絞を小さくしてピント・グラスに鮮明の映像を見たるを度として之れに向つて適度の露出を與ふべきであります。

又黑ずんだ寫眞や、ドギッキ寫眞、濃セピヤの寫眞の時は強く明るき光線にてボケない限り成る可く絞を大きくして、之れに應ずる適度の露出を與ふるのであります。

又全身等より半身等に引延す場合は、無論光線を強く明く絞を鮮明に至るまで絞り、適度の露出を爲すのであります。

尙書畫の復寫の時も、寫眞と同樣でありまして、白紙に墨書又は墨畫したるものは、矢張り温和なる光線にて比較的小さく絞りて適度の露出を與ふ可く、又彩色畫や古畫の如きものゝ時は整色乾板とス

クリーンとを利用して撮影する方が好結果が得られます。

夫れから前述の淡き寫眞や、青味勝の寫眞や墨書墨畫の寫眞は成る可く濃厚なる現像液に臭素加里(一割液)を滴下したるものにて現像すべきであります。

之れに反しドギッキ寫眞や、陽陰の差甚しきものに對しては淡き現像液にて所理する方が好結果が得られます。

此等の理由は前述現像に就ての項に述べて置きましたから御覽を願ひます。

尙復寫は絞の調節が最も肝要である處から序に絞に就て少々愚見を述べて見ませう。

世には絞りとは物體を鮮鋭に映寫せしむる爲めにのみに用ゆるものゝ樣に解して居る人々もある樣であるが、私は決して夫れ許りのものではないと思ふて居ります。

即ち絞なるものは、光線の强弱に對して之を調節し以て物像を鮮明に映寫せしむるものであると信じます。

丁度、鏡玉の絞りは私共の眼に於ける瞳孔と同一の働きをなすものでありまして、私共が强烈なる日光の處に出でますれば忽ち瞳孔が小さくなりますし、又暗い處に行きますれば忽ち大きくなりまして、明瞭に物像を見得る樣に致しますのであります。

若しも瞳孔が强烈なる光の處に行つても小さくならず、又薄暗き

處に行つても大きくならなかつたならば、到底物體を鮮明に見得る事は不可能でありませう。

夫れと同樣に、强烈な光線の處で絞を大きくして物體を寫しても決して明瞭には寫りません。又薄暗き處で絞りを小さくして寫しても中々容易には寫らないのであります。假りに日光の强烈なる處に於て、鏡玉の絞を大きくして焦點を合せ、新聞紙の活字を寫して御覽なさい、如何樣に迅速度に寫しても、到底明瞭鮮明なるものは出來ません。

又薄暗い處で絞を小さくして黑羅紗の衣服を寫して御覽なさい、露出時間が掛つて容易に寫りません。そこで此の寫さんとする物

體の明るさに應じて絞を調節すると云ふ事は、中々大切なものでありまして、若し此の調節を誤つたとしたならば、到底鮮明な寫眞は得難いのであります。

之れを細かく申しますれば、只今も極端の例を擧げて見ましたが絞が被寫體の明さに對して大き過ぎた場合は、新聞紙に於けるが如く、丁度我々が眩しくて物を判然見得ざる時の樣に、不鮮明な、ハレーション的な、グラ〳〵した樣な、ギラ〳〵した樣な、カブツタ樣な、只バアツトした樣な寫り方になるのであります。

即ち景色であれば廣漠たる原野とか、海景とか、遠山など又專門家としては、古い褪色せる寫眞の復寫の場合等に絞りが大に失すれは

斯樣な結果になるものであります。又絞が小さ過る場合は、どんな事になるかと云ふに、第一に物體の圓味と云ふ味ひを失ふのであります。次には物體と物體との距離を現すべき即ち遠近觀を潰して仕舞ふのであります。夫れから吾人が平常見つゝあるよりも諸物體をして餘まりに微細に映寫すると云ふ嫌いがありまして、殊に此の事は美術的作品の場合などには、至極感心の出來ぬものであります。

斯樣な譯でありますから、景色にせよ、人物撮影にせよ、絞りの小さ過ぎた寫眞ほど厭なものはありません。

地圖的な、平板な、何等面白味もなく、少しの味ひもない、彼の名所エ

ハガキ寫眞の類が即ち夫れであります。

夫れから遠近觀を現はさんがためこか、浮き上りを見せんがためこか言ふて、絞を大きくして、方外なボカシ方をする人々を見受けますが、私こしては餘り感心致しません。

例へば專門家の寫した半身像にしてからが、七分三分位に向いて居るものこして前の方の眼及耳は判然こして居るのに、後方のはボケテ居り、前方の肩はキツパり寫つて居るのに、後方のはまるでボヤ〳〵になつて居るのなごは、吾人が實際に見てゐる感じこしてはごうしても本當こは思へません。

一寸理屈から考へても、同じ顏の内で僅か二三寸の距離の處で斯

くも酷くボケルこ云ふ筈がない樣に思はれる。夫れも目的たる浮き上りが成功して居るこすればまだしもだが、浮上つて見えるのよりか寧しろ、大ボケにボケて居るのが厭に目立つ位ゐなもので、決して良い氣持のものではありません。殊にボケ方が例のダブルライン風のゴツ〳〵したものこ來てはこても穢なくて見て居られません。

景色でも同じでありまして餘り後景のボケたのは良い感じのものではありません。

夫れから又後景のボケタよりか、前景のボケたのこ來ては私こしては實以つて大嫌ひであります。人物にせよ景色にせよ、前にブカ

ブカした水母の樣なものがあつたりしては實際身慄ひが出る樣です。

殊に演說會場などを寫す場合に前景の處に途方もない大きな頭のボケタのがアチコチにボカ〳〵突出して居た日には實際遣り切れたもんぢやありません。

景色でもそうです、前景の處に以つて行て、ベラ棒に大きくボケタ草などのあるのは、如何にも穢ならしくていけません。さて私は由來、景色を寫します時に、彼の寫眞的鮮鋭を柔げんがために、ピントを前景よりも尙前に付けて置いて、自分の欲する鮮明さの處迄絞を以てピントを加減して行くのでありますが、どうも始からピントを合

寫描ろな粗

寫描ろな密

せて置くよりか、非常に描寫の工合が面白く行くのです。何卒一度皆さんの御試みを願ふのであります。

スポッチングに就て

スポッチングとは俗に穴埋、スポット、スパート、又はトチなどゝ色々に申して居りますが、一體此の仕事は種板にある瑕或は燒付の時の塵埃等より生ずる白き班點を繪具にて埋めて目立たぬ樣にするのが目的でありますが、世間では此の語を今少し仕事の範圍を廣くして使つて居る樣であります。

私は陰畫の修整に對して常に之を陽畫の修整とさえ唱へて居り

ます。

さて私のスポッチングに用ゆる繪具は主に水彩繪具を使つて居りまして、印畫の色に應じて夫れに相應する色合のものを撰擇致して居ります。

世間には日本の墨を使つて居る人もある樣に見受けますが、日本墨は一旦皿に取り乾いたものは容易に筆にては溶け惡く、夫れにアーチユラアイリスAの印畫なごには透かして見ると光澤が合ひ惡く墨が目立つてごうも面白くありません。

夫れに寫眞の色が何時も同じと云ふ譯でないから、到底墨一點張りでは不都合であります。然るに水彩繪具であると、第一溶ける事

は實に面白い樣であり、色は望み通りのがあるから先づ申分はないのであります。

若色に思ふ樣なのが無い場合は各種のものを混ぜ合すれば、ごんなのでも好きな色を造る事が出來ます。

さて、スポッチングは單に瑕埋め、穴埋め、許りとすれば極めて簡單でありますけれども、前述の樣に陽畫の修整と致しますと中々六ケ敷ものであり又大切なものであります。

此の仕事は陰畫修整の見落しから來るのも隨分ありますが、始めから原板の修整でやるよりは、スポッチングで行る方が大に都合の良い場合がいくらもあります。

玆に一例を擧げて見ますれば、頬の高いのを低く見せる場合に小刀で削るなどは、其の面積が廣いので中々面到でもあり、且つ餘程巧妙に行らなければ取返しのつかぬ失敗に了るのであります。又横向きの場合に輪廓を削るは極めて容易でありますけれども、さて切取つた跡の骨格の修理が中々容易ならぬ技巧を要するのであります。

斯る場合には陽畫の後、スポッチングにて直せば實に雜作はないのであります。

尤も斯る面倒な仕事の場合は印畫紙撰擇も又必要であります。

私は斯樣な場合には常に粗面紙(アーチユラのCSE)の類を使用

致して居ります。

而して2H位の鉛筆にて局部を修整して跡をハンカチ(洗濯して糊氣を落したるもの)の柔かきものを指頭に卷いてボカせば少しも筆跡を止むる事なく美事に成功するものであります。

是れはホンの一例に過ぎませんが、斯樣の場合に此の方法を以つてすれば容易に好結果が得られるものであります。

其他生へ際の毛や、眉毛などは未熟なる原板修整の刀に依るよりも、寧ろ此の方法を以てする方が安全の策と思ふのであります。

夫れから私は原板修整の際鼻の陰影などの中に點々の黑き班ある場合は其の儘に殘して置き陽畫の後にスポッチングで修整する

のであります。

そは斯る場合に鉛筆を用ゆる時は大切なる鼻の高さを現す可き陰影を傷ふ恐れがある爲めであります。

此の事は往々に見る修整上の通弊の樣でありますから特に御注意申す次第であります。

序ながら、ブロマイド引伸に能く見る處の集合寫眞より一人を拔き取り半身などに作る時、原板を塗潰してバックを眞白にしたものを黑バックにするとか、或は雲バックにするとかの場合に畫工の手を煩わさずして簡單に作る方法を一つ述べて見ませう。

黑バックに作るには最初バラピン紙にてブロマイド引伸の中の

人物の形を切り拔き、之をブロマイド引伸の人物の上に丁寧に載せ置き中央に重りをなし、バラピン紙の動搖を防ぐのであります。

而して臭素紙印畫の色合と同じ色の繪具を溶し置きほうじ茶の時の金網を手に持ち、齒磨揚技に繪の具を浸し、ブロマイド寫眞より約二尺を隔りたる上方の處にて、揚技を金網に擦り、繪具の飛沫を畫上に落して適宜の色合になすのであります。

適宜の色合を得たならば、バラピン紙を畫上より取り去れば立派なる黑バックのブロマイド畫が得られる事になります。

此の方法に依れば濃淡は自由自在なるのみならず、又隨意に雲のバックが作られるのであります。

又前川氏が特意とする油繪具を用ゐて成す修整法も中々面白いものであります。

夫は某外國人が油繪具を用ゐて彩色法をなしたるを利用したのでありまして、最初ブロマイド紙全面にテレメン油とリンシード油とを混和したるものをハンカチーフの柔かなるものに浸して班のない樣に一樣に塗り附け、而して後之を能く拭き取りて土臺を作り置くのであります。

而して寫眞と同じ色の油繪具を柔かなるハンカチーフに附け之を指頭に卷きて寫眞に塗り附けるのであります。

斯樣にして技術に熟達さへすれば、雲のバックにせよ、ボカシにせ

よ好きなものが自由に得られる事になるのであります。

又人像寫眞の中に濃度を增したき場合とか、景色であれば空間に雲を配ふとか、森を强めるとか、山を濃くなすとか、色々のコントロールが出來得るのであります。

尤も大きな所は、指にハンカチを卷き付けて行つても差支はなはれども、小さな部分は箸の先を削りて尖らしたるものに矢張ハンカチーフを卷き夫れに繪具を塗り付けて行へば大低な小部分にも施す事が出來るのであります。

臺紙に就て

（藝術寫眞の研究）の著者南氏は其著書に斯樣な事を述べて居られます。

「台紙色相の目的は寫眞を引立たせるものではない、印畫を四圍の世界と絶縁せしめて、小さき印畫面に人間の注意を集中せしむるものであると」

實に此の通りで如何にも面白く說いて居られる。

然るに世間多くの寫眞家殊に專門家に在つては臺紙の目的を如何樣に考へて居るか實に其の意の在る處を窺ふに苦むのでありをります。

そは近來多く見る臺紙の中には、寫眞畫と臺紙の色との不調和は

申すまでもなく、殊に私の不快に思ふのは意匠の如何にもゴテ〳〵としてケバ〳〵敷く、其爲めに肝心の寫眞を蹴散して仕舞ふ事であります。

加之、近頃は尙其上にもネーム及びマークなどを處狹きまでに打込み或は打出しにし、甚しいものになると、マークを赤色或は青色などにて色彩りを爲し、まるで玩具見た樣なものを用ゐて居るなどは餘り感心が出來ません。實の處ネームなるものは元來自家の廣告であつてそう無暗と人樣の物品に對して遠慮もなくゴテ〳〵と入れる筈のものではないと思ふのであります。

殊に甚だしいのになると表面の處に羅馬字で一つ、日本字で一つ

其上にマークがつぎ裏面には又ネーム表紙にも又ネーム、と云ふ鹽梅に小さな寫眞一枚にネームの四つも五つも入れてあると云ふ始末で只々驚くの外はないのであります。

殊に其のマークなるものが(無論惟一の裝飾の積りならんも?)自家の考案になつた面白きものでもあるならばまたしもだが、其多くは某大家の夫れを其儘失敬したのであつて、私には夫れが何んの積りなるや不斷不思議に堪へぬ次第であります。

殊に其の意匠なるものが、西洋其儘の模倣品である事は一目瞭然たるものであつて、然も夫れが只西洋臭い許りで何等面白味もなければ薩張可笑くもないと云ふシロ物であります。

夫れを何處にほれたものか猫も杓子もマークとさへ謂へば之を似ねて居ると云ふのは、何んぼ考へても判らないのであります。

一體かゝる藝術的のものを模倣すると云ふやつは、極めて不權式なものであつて、殊に人のマークとするものを擬すなどは以つての外であります。之れが登錄にでもなつて居樣ものなら、直に法律の罪人である。ヨシ同じ模倣品であつても、眞に自己の趣味に合致したものであらば、幾分許す處もあるけれども、全然自分を素通りした丸呑と來た日には、テンデ御話にならぬのであります。

模倣は敢て臺紙ことばかりに限らない、寫眞の位置なども同じ事であります。

往年外國の女優が兩手を後頭に當てゝ、ブンゾリ返つて笑つて居る位置の寫眞があつたのを猫も杓子もと云ふ風に多くの寫眞師がソックリ其儘の位置を眞似して寫して居るを、看板其他で數々見た事であつたが、餘り感心した話ではありません。

或は或る展覽會で、某氏が油繪に似たものを出して評判がよかつたとなると、是又猫も杓子もが其の通りのものを眞似すると云ふ風に其癖其寫眞に就いて自分には何んの共鳴も持つて居ない癖に其の形式丈けを模倣するのであるからして、出來たものが良かろう筈がなく、木に竹を接いだ樣な者を作つて居る人々を見受るのだが、ごうも早や譯の判らぬ話だと思ひます。

扨て大分横道に、は入りましたが、前述の如く、ごうも我國では臺紙の眞目的と云ふものを誤解して居たかの樣に思ひますが、元々臺紙なるものは南氏の云はるゝ如く、寫眞をして他の世界との緣を切り放つて小さき寫眞と言ふものにのみ眼の注意を集中する樣にとの目的でありますから第一に寫眞の色を惡く見せたり或は色が强過ぎて寫眞を蹴散して仕舞つたりする樣な色の紙ではいけませんから其の點を考へて紙の色に就いての撰擇は大に注意を拂ふ可きだと思ひます。

夫れに臺紙の眞目的から考へて見るならば、裝飾のゴテ〳〵だのフレームのボケた、ダブル燒なぞは最もいけないと云ふ事になるの

であります。

そこで臺紙の色合はと言ふに、夫れは元より寫眞の色合に依る事でありますが、私の考へではアーチュラアイリスABなごの色合としては先づ薄茶、薄鼠クリーム、白なごが良く調和される事と思ひます。而して青、濃茶、黄、濃鼠なごは餘り面白くないと思ふのであります。

又セピヤ調なれば白、クリーム、薄茶、濃茶、なご適當だと思はれます薄鼠、青、濃鼠、なごは餘り感心致しません。

意匠は薩張りしたもので殆んど無地同樣なのが却つて肝心の寫眞を引立たしむべく、隨つてネーム等もほんの自分の作品であると

云ふ記號丈けに止めて餘り目立たぬ樣に小さく入れて置く方がごれだけ奥ゆかしくもあり高尚であるか知れぬのであります。

臺紙の外觀に付いての話しは此位に致しまして是より少し許り内容に就て御話し申しませう。

一概に臺紙と云へば、さして重きを置く可き價値あるもの樣に思われませんが、中々以つて輕視すべきものでありません。

如何となれば、最も恐るべき寫眞の變色の原因は、臺紙より來る事の多き實例は歴然として存在して居るのであります。

私も此の苦き經驗を嘗めたる一人でありまして、其の爲め少からず世間の信用を害した事と思ふのであります。實に恐る可きは臺

紙であります。

そが含有する內容には種々變色の原因となる可き毒素があるのであります。

其毒素の媒介となる可きものは是又臺紙中に含有する水分であります。此の水分たるや、製造後二年三年の長年月を經るものと雖も驚く可き多量の水分を含有して居るのであります。

若水分の有無を試驗せんと欲するならば、一枚の臺紙を取り此れをガラス板上に置きアイロンにて二分間許り臺紙を壓して御覽なさい、臺紙內の水分がアイロンの熱氣の爲めに蒸發して、ガラス面に露の雫の點々たるを見るのでありませう。

一二年を經過したる臺紙でさへも此の通りでありますから、製造後直に使用するのなどは如何に夥しき水分を含んで居る事か想像するに難くはないのであります。

殊に梅雨期に製造したるものに到つては實に寒心に堪へぬのであります。

尙臺紙が寫眞の變色に多大の關係があると云ふ實例を擧げますれば、東京某寫眞材料問屋に十數年前より外國から來た多數の見本用寫眞が在る中に臺紙貼りのものには變色したものも多く（マクリ）のものには殆んど變色を見ないと云ふ面白き經驗を見たのであります。

私は爾來臺紙の直接貼を廢して凡て挾み込み或は浮し貼りに致して居るのであります。

此の方法は變色の憂ひを防ぐのみならず、畫面の麗滑を保ち彼の臺紙直か貼りに見る如き臺紙面の凹凸又は糊のブツに依るデコボコを絶對に防ぐの功を有し、且つ何時にても自由にマクリとして使用し得る便宜を有する等進歩せる現代に適する良法と信じ且つ推薦する次第であります。

特に初學アマチュアーの爲めに

近年寫眞に趣味を有たるゝアマチュアー諸君が多くなられた事

は、私共專門家としても同好の士が殖へたのであるからして如何にも賑わしくもあり、自然勢も附くと云ふ有樣で、誠に喜びに堪へぬ次第であります。

扨てアマチュアー諸君に對しての寫眞著書は、已に數多く出版されて居りますので、私が今更同じ樣な事を操返す必要は認めませんから他書に記述してある樣な、レンズの說明及び使ひ方或は各種現像液仕上液等の處方は省きまして簡單に寫眞術中の最も大切とする、要點のみを述べて、幾分の御參考に供したいと思ふのであります。

そこで諸君は最初に寫眞器械を求めやうと言ふ事になりませう。諸君の都合もありませうが、ごうせ鮮明な寫眞を寫したいと思わ

るゝならば良く寫るだけの器械を求める事にせねばなりません。

然るに市内に販賣されて居る器械の内には、只器械と言ふ名計りで、どうかかうか、寫るには寫るけれども、寫して見て、何んの面白味もない、實にチッポケな、ハッキリしない、動くものを寫さうとしても寫らない、と言ふ樣なツマラヌものが澤山にありますので只廉くて見掛けの良い位の見當で買ふても、丸で金を棄てる樣なもので、實につまりませんから御注意をなさるのがよろしいのです。

而して切角始めても器械が惡い爲めに面白いと云ふ所まで行かぬ内に止めて仕舞ふ樣な事になるのであります。

それで私の考へでは器械を求めるならば、どうしても現今の相場

なれば百二三十圓位のものは買つて置かねば到底寫眞らしいものは寫らないと思ひます。

又價格許りでは安心が出事ませんから買ふ時には寫眞に精通な素人なり信用ある寫眞師に一應鑑定を乞ふ方が慥であります。

夫れに寫眞の大きさは小さくとも手札判以上のものでなければ見榮がありません。

種板は卷フィルムでも、フ井ルムパックと云ふて角形に切つたのでも、又ガラスの種板でもよろしいのですが、フ井ルムは持運びに輕くてよろしいが、良い寫眞を作り得る點から云へばガラスの種板の方が優つて居ります。

器械の取扱ひ方や寫し方は、寫眞書を見るよりも原料店で說明して貰つた方が早判りです。

夫れから現像及び燒付仕上げに要する器具及藥品も原料店で揃えて貰つて說明を聞けば夫れで澤山です。

尙現像法燒付法仕上法も同時に原料店に說明を求むれば喜んで敎へて吳れます。

又藥液の調合も原料店にチヤント調合して賣つて居りますから之を求むれば雜作はありません。又自分で調合せんとならば調合法を書いた使用書が原料店に備へてありますから、夫れを貰へば大抵は只で吳れます。調合法には良否があるならんとの考へも起らう專門家と雖も大抵同一處法で行つて居るのです其れは各外國原料會社最良の處法を翻譯したのでありますから大丈夫であります。

私の現像法はシード乾板の指定現像法であります。

燒付仕上法はアーチユラアイリスの指定處法であります。

是等の所理法に就いては前述(現像に就て及燒付仕上に就て)の項を御熟讀あれば精しく書いてあります。

斯樣な譯で寫眞器械を求める法は前述の通りにして、現像燒付仕上おごの器具は孰れも廉價のものであるから、原料店に一任して差支へなく又寫眞器械の取扱法から現像仕上燒付の方法等は原料店

にて說明を乞へば敎へて呉れるし藥品の調合は各原料製造會社の指定法にて十分であるから別にそれらに就いては何も頭を使つて面倒な本などを讀む必要はないのであります。

そこで諸君が最も注意し且つ熟練せねばならぬのは露出であります。

露出(寫し方)が正當の處に行けば、もう寫眞の八分通りは成功したものと見てよろしいのであります。

處で私の多く見るアマチユアーの種板は殆んど露出の失敗であります。

露出が非常に過ぎたり、足りなかつたりしたのは、どんな熟練な專

門家に持つて行つて現像して貰つても到底駄目であります。又修整しても駄目であります。燒付仕上に如何樣に骨を折つても矢張り駄目であります。

露出露出只此の露出を熟練なさい。處で此の一番大切な露出の加減はどうしても敎へたいと思ふても此れ許りは敎へられるものではありません。

能く寫眞書などに露出表などが書いてある樣ですが、あんなものは實際役に立つものではありません。

海岸の時は一秒の何分の一だとか、山ではどれだけとか、晴天の時はどうだの曇天はかうだのと、細かに書いてあるが、假令山だ海岸だ

と云つても朝晝夕に依つても光線の強弱があつて同じ曇天と言ふても曇り工合で非常に光線の強弱があります。

斯樣な譯合であるからして露出表等に拘泥する事は一切止めにして寫す度毎に其の時の光線の強さと云ふものを會得して、此の位の光線の時には此の位の露出でよいと云ふ事を心一つで見定める樣に心掛けるのが肝心であります。

又ピントを見る式の器械を持つ人は絞の大さの定まつた後、ピントグラス面にて見たる光線の強さを以て露出を認定する事も肝要であります。但し此方法の節は暫時カブリ布を冠りて眼を落付かせ、而して後に見定める事を忘れぬ樣御注意申します。

さもないと外光の強さに狎れたる眼で見る時は、ピングラス面の光りが非常に暗く見へて、ツマリ騙される恐れがあるからであります。

此の二つの方法に依りて熟練を希望するのでありますが、然し此熟練と云ふものは何術にせよ、一朝一夕と云ふ譯には到底參りませんからして、そこは一年なり二年なりの辛抱が肝要であります。

玉突大弓の樣な形に現はれたものでさへ熟練と言ふ事は中々容易でありませんのに、寫眞の露出と來ては、時々刻々に變る日光の、而も秒の微を捕へる無形物に對する頭の働き一つですから、中々以つて容易なものではないのであります。

處で初學者の時でも、たまには鮮明な良い寫眞が出來る事のありますのは、ツマリ露出がマグレ當りに當つたのであつて、丁度大弓なり玉突なりが數多くの中には、マグレ當りをしたのと少しも變りはないのであります。

左樣なマグレ當りの寫眞を得意に見せて歩いて居た人も大分見受けますけれども、マグレ當りでは何んにもなりません。

一つ本當に百發百中の腕前になつて御貰ひしたいのであります。

若そうなれば夫れこそ興味津々止めんとして止む能はざる境地に到るのであります。

露出なる哉露出なる哉要は是れのみであります。

是より露出の過不足の見分け方を說きませう。

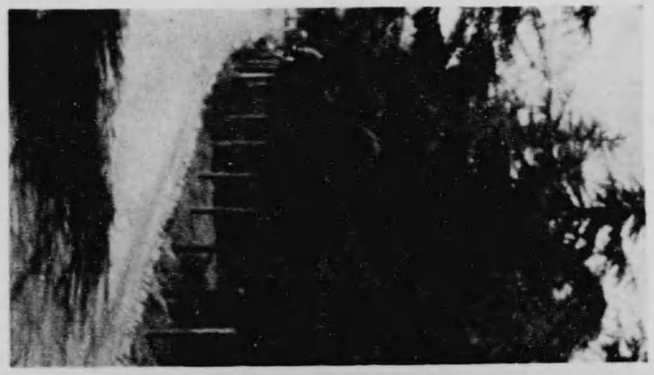
露出の過ぎた種板を見定むるには新聞紙を机上に布べて其の上に種板を載せて見て活字が容易に透いて見へないものは露出の過ぎたものであつて、過ぎ方の多い程愈々見へなくなるものであります。

之に反して露出の不足なのは新聞紙の活字がスツカリ透いて殆んど全部が見得られるのであります。

斯樣なのは、いづれも良い鮮明な寫眞は得られませんので、露出の過ぎたのは、白ツ茶けて、ぼんやりするし、不足なのは淡つボクて、煤ボケて矢張ボンヤリして物體が何れも鮮明には寫りません。

尙細かに申しますと、露出の過ぎたのは人物であれば、黑くなる可き髪が鼠色になり、白くなるべき顏が又鼠色になり、黑の羽織が是又鼠になつて仕舞つて甚しくなるとホワイトシャツやカラーまでが鼠色になつて、ツマリ白も黑も何にもかも皆鼠色になつて仕舞ひ、眉毛は淡くなる生へ際の毛も生へ上るし、鼻は低く寫り、顏がペタンコになる、始末で寫眞全體がハッキリしない、ボンヤリした、メチヤメチヤなものが出來上る事になります。

景色にしても同じ譯で、船の帆が鼠となり、黑かる可き森が又鼠色となり、何んでもかでも鼠色となるのだから矢張メチヤなものになるのです。



度　邊

足不出寫

さ　源　出　寫

露出の不足なのは人物であるこ、ホンの白いもの計りが寫されて居るのであつて、先づホワイトシヤツこか、カラこかが寫て居り顔は額、鼻柱、頬、なごの光線の強く當る高い處計りが寫つて居る許りで、眼や、頬のコケた處や、鼻の下、腮の下、喉咽の處なごは眞黑になつて丸で印度人の化物の樣な顔になるのであります。而して衣服は羽織の襟も紐も凡てのものが寫されないで、一面の眞黑な影坊師の樣なものになつて仕舞ふのであります。

ツマリ、光線の當つた處や、白い物ばかりが寫つて、外の處はまだ寫らなかつたのであるからして、一體に淡黑の中に處々に白いものがポチ〳〵こ在る樣な、矢張りメチヤメチヤなものが出來上るこ云ふ

譯けになります。

そこで露出の適當したのになると、新聞紙の活字が顏やホワイトシャツの處は少しも見へないで髮の處は程能く見へ黑い羽織や光線の當つて居る處は微に見へ、影になつて居る處は能く見えると云ふ風に、ツマリ能く見へる處もあれば見えない處もあると云ふのでなければ良い種板ではありません。

斯樣なので燒きますと實に鮮明な氣持の良い即ち髮は飽くまで黑く、ホワイトシャツは飽まで白く、顏は程良く白く、衣物は程良く黑く、と云ふ鹽梅に寫され得るのでありまして、之は露出一つの巧拙から來るのであります。

適度露通

足不度露

ぎ過度露

此度は現像の事でありますが、現像に最も注意すべきは暗室の光線であります。

乾板と申しますものは、非常な驚く可き感光力を以て居りましてごんな微弱なる光線にでも必ず感光するものですから、細心の注意を拂ふ可きものであります。

夫れで暗室の安全を試すには、暗室の戸を締めて、其の内に少なくとも三分間許りは入つて居て、天井から壁と四方上下を見廻すのです。而して少しの光線の漏れる處もなかつたならば、もう安全な暗室であります。

夫れから暗室の赤ランプに注意せねばなりません。原料商で賣

つて居る赤ランプなれば先大丈夫ですけれども、全然信を措く譯ければ、にも行きません。ごうかするこ感光するのがありますから矢張一應試驗した方が確であります。其試驗は何んでもない事でツマリ乾板の半分を掩ふてランプから一尺許り隔つた所で赤光線を浴せて見のるです。而して三分間ばかりして現像して見て、掩わない半分が黑くなつたら正しく不安全なランプでありますから速に赤ガラスの安全なのこ取換ふる事であります。

暗室が不完全な爲めに光線を引かせては、如何に露出を完全に行つたこて何にもなりません。全部ボンヤリして仕舞ふのであります。

現像の時ばかりでなく始め取枠に乾板なりフ井ルムを入れる時には殊に暗室光には注意しなければなりません。

夫れから現像液を寫して來た乾板なり、フ井ルムに浸し、又は注いだ時に、間もなくバアット一遍に乾板の面が黑くなつて仕舞ふのは露出の過ぎたのであつて、こても良い結果は得られません。之に反して現像液を注いても容易に乾板又はフ井ルムの面が黑くならずソロソロこホワイトシャツの樣な眞白いものや、顏なごが黑くなつて來た許りで、衣服なごのこころは、ごうく黑くならぬこ云ふのは露出不足のものであつて是又好結果は六ケしいのであります。

夫れで正當に露出したものであれば、現像液を乾板に注ぐこ先づ

白いものから、淡色のもの夫れから顔、次で衣服髪と云ふ樣に順序良く黑くなつて來るのです。而して普通の現像液であると先七八分時間位で結構な濃度の種板となるのであります。

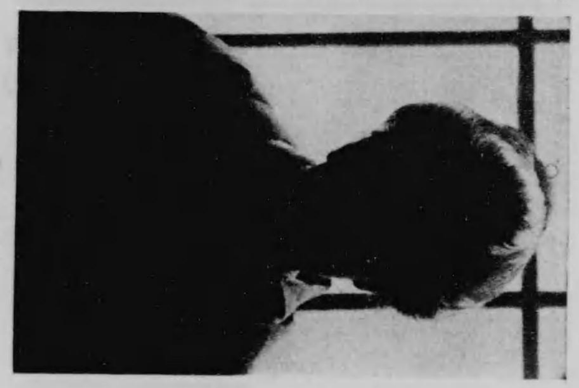
現像の濃度は矢張り數多き經驗の裡に、自然と此處だと云ふ處が赤色燈に透して見て、見極めが附く樣になるものです。然し現像の濃かつた場合、淡かつた場合には、後で補力法減力法と云ふものがありますから、敢て驚くには及ばないものであります。

呉れ〳〵も露出と暗室光の注意が一番です。

夫れから今度は撮影の事を申しませう。撮影の時に一番注意すべきものはレンズを強き光線の方に向けて寫す事です。コンナ事

線光向日

線光通常



クッパ光强

をしてはキツト、ボンヤリした寫眞しか寫りません。

私の見るアマチュアーの作品には、是れが多いので困ります。例へば座敷の日の當つてる障子をバックにしたり、空をバックにしたり、室内から日に向つて庭をバックにして寫したり、輝く海を背景にしたり、斯樣な事をしてはこても〳〵鮮明な寫眞が得られよう筈はないのであります。

ツマリ人間でも景色でも寫す時には、常に太陽を自分(技師)の背後か、側面に置く樣にさへすれば大丈夫です。

此の意味で假令直接太陽は見へなくとも非常に明るき處や輝く如き純白(白布、雪等)のものをバックにしては決して宜しくありませ

ん。吳れ〳〵も御注意申して置きます。

そこで以上述べました通り。

第一　寫眞器械の撰擇。

第二　露出の熟練(寫眞術中最大の要件)。

第三　暗室光の注意。

第四　強き光線の處(即ち空や、日の當る障子や、輝く海や、白い雲や、輝く石原及道路等)を背景にして決して寫さぬ事。

以上の四ケ條を堅く守つたならば、必ず鮮明なる氣持ち良き寫眞が間違ひなく得られるのであります。

實用寫眞と藝術寫眞

寫眞を分つて實用寫眞と藝術寫眞との二種に區別する事が出來るが、其の本領とする處は孰れにありやと云ふ事になると、私は躊躇なく實用的にありと答ふるのであります。

即ち寫眞の本領とする處は、器械と藥品との作用に依りて諸物體の影像を瞬間に映寫し得ると云ふ處にあるので、現に世界は此力を百般の實用に供し爲に偉大の恩惠に浴しつゝあるは歴然たる事實であります。

學術に、工業に、軍事に、通信に、將た人事に、瞑想一番……暫し虚

心に立歸りて思ひ見るならば。

世界若し今日此の寫眞なるものを全然失ふたこしたならば如何……其の不便其不自由世界は直に手を跪ぎ足を斷たれし悲哀こ寂莫こを感ずるであらう。

或曰はん寫眞が實用こして効力の偉大なる元より之を知る然も爾專門家の爲す人像撮影なるものは單に嗜好的贅澤品ならずやこ答えて曰はん嗚呼無智なる者よ……

□爾が朝夕禮拜する亡き父母の面影は果して誰人の手になりしものぞ。

□幾千里異境の空に居賜ふ夫に已が無事こ幼な兒の成育を音づるよりよきものは誰人の手を煩はせしぞ。

□遠きも近きも居ながらにして然も穴のあくまで妻たる可き候補者の顏を見得るは誰れ人の賜ものか。

□君は新に得たる美しき妻を遠き親戚知已に紹介するを好まざる乎。

□人の父たる君よ君は遠きに嫁せし愛し娘の安けき姿こ其生みし初孫こを見るを欲せざる乎。

□海外留學の君は古國に在ます老たる父母の面影に接するを欲せざる乎。

□君は海外旅行免狀に添ふる或ものを要せざる乎。

□君は受驗願書に添ふある者を要せさる乎。

□いこも目出度父母金婚の此の盛儀の狀況を記念こして殘し度きは子たるものゝ至情ではあるまいか。

□思ひ出多き同窓學びの友だちが明日別れては何時又逢ふ時のあるべきこ袂を分つ好個の記念こしては何を撰む可き乎。

數へ來れば限りがない、我專門家の執りつゝある日々の業は斯も尊き人間至情の發露の交驩品であるのである。

此れをしも尚嗜好品贅澤物こなすのであらうか、世間蒙昧の徒、やゝもするこ、寫眞を一概に贅澤品こ唱ふるのである、其の愚咄ふに堪ゆこ雖も、其因て來る處又なしこせず、依而左に聊か愚見を述べ斯る

誤想の一日も速に氷解せん事を希ふのである。

昔我國に於て寫眞の始つた頃は寫眞てふものは只珍らしい不思議なものであるこ云ふのであつて、どんなものか一つ寫して見ようこ別に何等の目的こてはなく單に見世物でも見る氣になつて、ホンノ娯樂の爲に寫したものである。

後には只寫すのでは面白くないこ云ふので、立廻りや道行の處などを能く寫したものであつた。

處が、もう現今では寫眞を珍しがつたり、不思議がつたり、面白がつたりする者は一人もないので、從而誰れも娯樂の爲に寫すものは殆んどないのであるが、因襲こ云ふものは恐ろしいもので、何の氣なし

に寫眞は贅澤品なぞゝ稱して居るのである。

前に謂ふた通り我々の日々作りつゝある寫眞は、いとも尊き人間至情の發露の交驩品であると云ふ事を思ふて貰ひたいのである。

叙上の如く寫眞は實用上偉大なる効果がある上にも、尙之を藝術品として賞翫し得ぬ事もないのである。

勿論器械と藥品の作用を借りるのであるからして、到底繪畫彫刻等の如き純正藝術品として起つ譯には行かないのである。

寫眞家の中には藝術品ではないと云ふ人もある樣だし、又純正藝術品として立ち得ぬ事はないなぞゝ力んで居る人々もある樣だが私としては只今も申す通り、寫眞を純正藝術品とする事は當を得て

居らぬと斷言するのであります。

私の見解としては純正藝術品なるものは其作品の上に現れたるものゝ全部が作者純眞の生な感じの其者でなければならぬと思ふのであります。

例へば之を繪畫に見るならば、早い處が、畫中の一枝一草たりとも是れ皆作者の感じの現れであり、作者の心の承諾であるんである。

然るに寫眞はどうか。

一枝にせよ、一草にせよ、自分勝手に好な方角に向いて居るのであつて曾て寫眞師の干渉に依つて左右されたのではないのである。

此の一事に見ても寫眞が純正藝術でない事は明白な事柄である

んである。

そこで私は寫眞を純藝術品とは認めないが、決して藝術品でないとは謂はぬ、隨分藝術的のものが今後は現はれて來るであらうと信ずるのである。

就ては此の方面に向つて進みつゝあるアマチュアー諸君が、ゴムにオイルに苦心慘憺の狀が見えるのでありますが、私の考へとしてはアレ程までに人工を加えないで、寫眞は寫眞術の範圍内に於て巧妙に行つた方が良くはないかと思ふのであります。

若しも寫眞術の範圍内にては到底藝術的のものは得られなくてアノ樣に多くの人工を加へなければならぬと云ふのならば、寧ろ憖

に器械の力を借らずとも、始めから筆許りにした方が良くはないかと思ふのである。

亦諸君の人工的技術が愈々進境に到つたならいざ知らずだが今迄に私の見た處では、どうも人工を加えた處と加えざる處とは統一を缺いて居る樣に感じてなりません。

例へば人工的の部分は、刷毛で畫いた樣に見えて寫眞其儘の部分はペンで畫いた樣に見えて、恰も木に竹を續いだと云ふ樣な感じが致すのであります。

夫れに此の人工を加えるに云ふ事は、一通り繪畫の素養のある人々に限るのであつて、其の素養のないものが、無暗に行つたからとて

到底巧く行くものではないと信ずるのであります。

先年某寫眞展覽會の節某々二名の洋畫の大家が、人工を加えたる寫眞を見て、眉を顰めつゝ話して居るのを聞いた事がある。

曰くごうか寫眞家達も、斯く寫眞と云ふものに對し、無暗に人工を加えると云ふ事丈けは止めて貰ひたいなあ……。ごうも可笑つて見て居られないなあ……。

つまり其の談話の要點を摘めば、人工を加えた寫眞の中には甚しいのになると、一枚の寫眞の中に、太陽が二つも三つもあるのがあつたり、ブチラから見てる處もあれば、コチラから見てる處もあると云ふ風に、視線が違つて居たり、曉天の雲を烈日赫々たる日中の空に入

れ込んで見たり、仰向て下から寫した雲を水平線に程遠からぬ空に配して見たり、正しくある可き形のものが正しく見えなかつたり、と云ふ風であつて我々畫家でないものには、左程にも思はないが專門家の眼からは、餘程滑稽に見え、馬鹿々々敷も見えて、とても眞面目には見て居られないと云ふ事であるから、此の點に付いては、大に注意すべきであらうと思ふのであります。

就きまして、常に私の不思議にも又殘念にも思ふて居る事がありますのは寫眞展覽會とか博覽會とかに、寫眞の審査員に洋畫家を推撰亦は囑托する事であります。

何故に寫眞に限つて他人の御厄介に成らねばならぬだらうかと

云ふ事です。

ツマリ洋畫の審査には洋畫家の審査員にて足り、日本畫の審査には日本畫家の審査員にて足り、彫刻には彫刻家の審査員にて足り、其の外洋酒は洋酒家にて足り、日本酒は日本酒家にて足り、洋服は洋服師にて足り、和服は和服師にて足る。

然るを、寫眞師のみは何の理由に依り、何の缺ける處があつて、他の御厄介を蒙らねばならないのか、私にはどうしても明確なる理由を認める事が出來ないのであります。

諸君――。所謂藝術寫眞なるものゝ發育が未だ幼稚なるが爲に止を得ず寫眞に類似せる畫家を煩さねばならぬのでありませうが或

は前述の如き滑稽極まる加工を爲すが故に監視教導の意味からでせうか、或は或一部の人々の樣にテンデ頭から洋畫及畫家を高等的階級でゞもあるかの樣に崇拜するが爲に、自然斯樣な形勢になつたのであるまいか、(斯樣な人物は畫には畫の本領あり、寫眞には寫眞の本領あり、と云ふ事を辨ぜずして專ら畫に心醉し只々畫の樣な寫眞であれば良いと云ふ風に、器械を擔いて繪畫きのケツを逐ひ驅け廻つて居る腸のない人物である)。

以上の三つが他人の御厄介になる樣な事になつた原因ではありますまいか、

考へて見れば他の業は、皆夫々獨立的權威を保ち、我々は我々にて

審査を爲すてふ當然の意氣を以て居るに引換へて、寫眞丈は他の御厄介に甘ずるこは、サテも不權式な事ではあるまいか。

一歩を讓りて若し類似の業であるから、參考的に畫家を囑託するこならば、洋畫の方でも寫眞家を囑託すべきが至當ではあるまいか此意味からしたならば洋畫に日本畫家、日本畫に洋畫家を囑託するのは無論當然の事こ思はれるのである。

處が、左はなくして只寫眞のみだから一向合點が行かぬのである。

扨叙上之原因の中藝術寫眞は未だ幼稚であるからして、畫家の補導を要するこ云ふ意味から來て居るのなら、我々實用寫眞家からはキツパリした事も言えないけれこも、考えて見れば、藝術寫眞こても

もう世の中に出てから二十年にもなるのであるからして、相當藝術寫眞に熟達の人もあらふし、又鑑識眼を供へて居る人もあろふこ思ふのである。

殊に我々實用寫眞家に至つては、決して畫家なごの御厄介に成る必要もなし、第一外の畑の畫家なごに、我々實用寫眞が判ろふ筈もないのである。夫れを我々實用寫眞家でありながら、若し畫家こ共に審査員に列したり、又は審査を受けて甘じて居る人々があつたこしたならば、其人々は實用人物寫眞の何物たるを知らないのであるか、薩張り譯が判らぬのであります。

私共實用人像專門家が敢て畫家を煩はす必要のないと云ふ實例として、彼の水彩畫の泰斗であり、近年アマチュアー寫眞家として有名である、三宅畫伯の著書の一節を記載する事に致しませう。

其著書に就て見ますること、畫伯が寫眞術に指を染められてより二十餘年にも亘つて居る樣で、畫家として斯く寫眞に熱心であるのには實に意外の感に打たれるのであります。如何に畫伯が人像撮影にも、久しき研究を續けて居られる事が左の一節に明に現れて居るのであります。

（寫眞のうつし方十ページ）

以上の如く私も知らず識らず寫眞を始めてから存外長くなりま

した。昔寫した近所のお下けの孃チャンが、今では大丸髷になつて二人の子持になつてゐるといふ始末。私もそんな昔の寫眞を取出しては、貴女方は立派な奥さんになりましたが、叔父さんの寫眞は未だ昔の素人の儘ですと笑ふ時があるのです云々。

（趣味の寫眞術一六三ページ）

人物寫眞は寫場を持たぬ素人には迚も手の出せぬものとして斷念する人があります。

これは大に私も同情します。特に婦人などの撮影は一層困難で多くは寫した美人連の感情を害せずに濟む事は稀であります。

比較的高い金を拂はされて夫れで滿足して悅ぶ樣な寫眞を寫し

出す營業家の技倆は、有繋にその道に苦勞したものゝ吾々は毎度感服して居る處です云々。

半可通のアマチユア天狗の多い中に、有繋は畫伯である。「美人連の感情を害せずに濟む事は稀です」の語は、眞に欺かざる告白である。アマチユアーの畫伯許りではない、是れで飯を喰つて居る多くの營業家ゝ雖ども、所謂「感情を害せずに濟む事は矢張稀であります」。之を思ふたならば、如何に人像專門家の仕事が、容易の業でない事が判りませう。

扨私は結論として申しますが、寫眞の本領とする處は元より實用にあるのであつて、そが偉大なる効果は全世界にハチ切れそうであ

る。ツマリ寫眞は實用上の働きのみで、もう十分なのである。然るを尙ほ藝術的に働かそうとするのは實はチト慾張過ぎて居るゝ謂はねばならぬ。さりながら敢て藝術的に研究したからとて、一向差支はないのであるが、前に言ふ通り寫眞は元實用的のものであるからして之を藝術的に研究するのには、少々無理な處がなきにしもあらずだから、ごこまでも其無理を通して行ふゝ謂ふ考へは、寧ろ徒勞に屬しはせぬかゝ思ふのである。

即ち無理に通そうとする處から、勢ひ多くの人工を加える事にもなるのであつて、ツマリ寫眞だか、畫だか、譯の判らぬものゝ成つて仕舞ふ樣な事になるのである。ごうせ、そうなるのなら寧ろ器械を拋

つて、繪畫きに成つた方が得策と思ふのである。

そこで私の考えは左樣な無理を通す事はキッパリと止めて、寫眞は寫眞だけの範圍内で造る事に極め、ドコ迄も其方針に依て研究の歩を進めたらどうかと思ふのである。若し左樣の方針で進んだならば、敢て畫家の糟粕を嘗める樣な不權式にも陷らず、又笑われもせず、又彼の鵜の樣なものを作る樣な事もなくして、夫れ相當に寫眞的藝術品が得られはせぬかと思ふのである。

扨て專門寫眞士の私としては少々お角違ひではあるが、是より藝術寫眞と云ふ事に就て聊か愚見を述て見ませう。

抑も藝術とは何かと申しまするに、私は斯く思ふて居るのであり

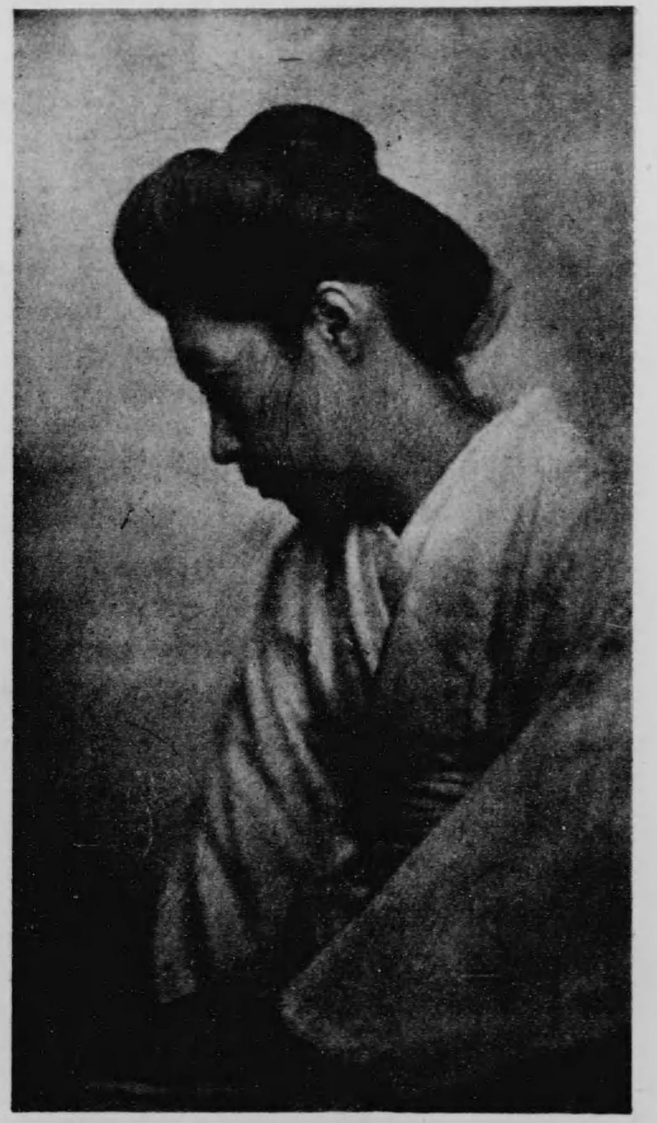
ます。

(藝術とは自己が或ものに對して起る其感動又は感興を或る方法に依つて表現するものである)と。

此意味からすれば繪畫、彫刻、演藝、音樂、詩歌、俳句、文藝等皆夫れでありまして、我寫眞と雖も穴勝此仲間から除外される筈はないのであります。

只寫眞は毎度申しまず通り器械藥品と云ふものゝ關係があつて他のものに比して表現可能範圍が極めて狹小であるのが誠に遺憾な處であります。

扨藝術を只今の樣に解譯致しますと、藝術に最も大切なるもの即



白衣の人

ち其生命とする處のものは、申すまでもなく內容の充實であります。

內容の乏しきものは藝術の價値なきものであつて、夫れは只單に藝術の形式を存する迄の事で、恰も寶玉の失われたる錦繡の袋に等しきものであります。

內容とは何かと申しますと。

例えば(此の畫題は如何にもローマンス的ものではあるが)茲に最愛の獨子を失ふて間もなき、若き妻の悲哀を物語るべき作品であるとしたならば其が製作中に、同情の感動湧いて、危くも作品に熱涙の痕を遺さんとした、位の熱情を持つて居らなくては、到底人を動かすに足る傑作は出來難いのであると思ふのであります。

彼の形式のみを遂ふて汲々たる例の燒直し屋などの作品に感じの無いのは、ツマリ此熱がないからなのであります。

嚮に攝政宮殿下がお茶の水教育博物館に催されたる活動寫眞展覽會に御臨の砌り、日活會社が活動寫眞の實寫現場を御覽に供し奉れる際、當の俳優尾上松之助が楠正成に扮し、子役松葉が正行に扮して、櫻井父子訣別の場を演じましたが、其技神に入り畏れ多くも殿下の御覽には露の光が拜され、並居る大臣待從武官供奉の方々一人として泣かぬものは無かつたのであります。

私は其時現場全景撮影の光榮を擔ひ、首尾能く撮影致しましたが其時子役の松葉が僅か十二歳の少年でありながら演藝中は申すま

でもなく、終演後もハラリ落つる涙を拭ひも敢えなかつたのには實際驚きもし非常に感動致しました。

實は今迄彼の九代目團十郎の如き所謂腹藝の人はいざ知らず、普通の俳優は演藝に於て眞の涙を流すものではないこのみ思ふて居りましたが、松葉の眞實の落涙を見て、實際に驚いたのでありました。

果して其日の夕刊に、松之助の感話を見て子役松葉の涙が眞實であつた事を確めました。

私は思ふ此の涙こそは殿下を始め奉り大臣以下供奉の方々を感泣せしめたる力であつた事を……。

藝術の極致は此處だと私は思ふのであります。

裡に熾るが如き熱情がなくては到底生に觸れた藝術は出來得るものではないのであります。

此意味から考へても藝術に模倣は駄目であり、燒直しは大禁物であると云ふ事が判るのであります。

以上述べました如く藝術には內容が主でありますけれども、其內容を表現する手段としては是非形式に依らなければなりません。

さらば其形式とは何ぞと申しますと、私は藝術寫眞に就ては是れを二つに大別致します。

(1) 構圖　(2) 調子

構圖とは種々の直線種々の曲線種々のマッスに依つて組立てら

れて線と線との釣合、線とマッスとの釣合、マッスとマッスとの釣合及畫の切方等であります。

調子とは陽陰の照應、グラデーションの豐富、畫調の硬軟、圓味と深み色調の撰擇、遠近觀の豐富等であります。

就中、藝術寫眞製作上最も困難を感ずるのは遠近觀と圓味と深み。の貧弱なのであります。

寫眞が所謂、寫眞、寫眞、するのは、此の二つの貧弱が大原因を爲して居りまして、繪畫の樣な譯に行かぬ所以は此處であります。

而して尙繪畫が我寫眞に對して誇るに足るのは、色の自由を保有して居る事です。此れ丈けでも寫眞は藝術としては今の處到底繪

畫の比ではありません。

大層長談義を申ましたが、今後は御互に寫眞はドコ迄も寫眞に立脚し、其範圍内に於て出來得る限りの努力を以て藝術的方面の研究に進みたいと思ふのであります。

○寫客の心得

昔は寫眞を寫すには晴天の日が宜しいとされてあつた。夫れは濕板法と謂つて御客さんの顏を見てからガラスに藥を延いて寫したもので、其法でやると、晴天の極く明い時でも、寫眞室で寫すのには少くとも十秒位の時間はどうしても掛つたものです。若、雨天とか

夕景にでもなると十秒は愚か三十秒も一分間も掛つて、其結果こしては、良いものは到底出來なかつたのであります。

そこで、曇天や、雨天や、夕方は、いけないものとされてあつたのであります。

處が、もう三十五年も前から乾板法(當時は早取寫眞)と云ふものが出來てからは、明い處であると、ホントの瞬間に寫り、曇日や雨天又は夕景でも僅か三四秒の早さで、寫ると云ふ事になりましたから、曇天や雨天にても一向差支ないのであります。

然し成可く早く寫るほど、寫さるゝ人の爲には樂でもあり、夫れに生々した顔付に寫りますから、春夏の候は午前九時頃から夕は五時

頃までが最も宜しいのです。秋冬は午前九時頃から午後三時頃までが一番宜しいのであります。但、ごうかすると、非常に暗い日が雨天の時にありますが、斯樣な日だけは見合せた方がよろしいのです。

夫れから衣服の色合を注意する事は大切であります。

一番宜しくないのは、白、水色、桃色、薄紫、空色等でありますが、其中でも白は元より白に寫りますから、そう惡くもありませんが、水色、桃色、薄紫、空色、なごは皆白く剝げた樣に寫りまして、甚だよろしくありません。殊に斯樣な色合のものに薄模樣あるのなごは、大底摸樣が消えて仕舞ふのであります。彼の御婦人方の紹の薄模樣は夫れであります。

夫れから赤、蕉茶、海老茶、濃黄、濃綠色等は眞黑に寫りまして、餘り感心致しません。夫れに黑地に赤、海老茶、濃綠等の模樣は殆んど現れませんで、只黑無地の樣になつて仕舞ふのであります。

其外の色合は凡て結構に寫ります。

寫眞の時は餘りに髮に油を附けてはいけません。ツマリ光るものは白く寫りますから、成可く少ない方が却つて黑い髮に寫ります。婦人は仕方もないが、男子の髮に油の多いのは、寫眞には無論の事平常でも餘りゾツト致しません。

白粉の餘りに濃いのも宜敷ありません。殊にマツ毛に附着して居るのは、ハツキリした眼には到底寫りません。ツマリ、ドロンとした眼に寫りますから御注意を願ひます。

夫れに顏が平べつたくなり、鼻が尙更低く見えます。

夫れから鼻の低い人、白粉を施したる人、平べつたい顏の人、頰骨の高い人は、光線の方に向つてはいけません。若しも寫眞師の言ふ事を聞入れないと、鼻は益低く頰は益高く、顏は彌か上平べつたくなりまして、非常に醜い顏になつて仕舞ます。

尙寫眞師の向ける方には、疵があるとか、髮の膨み方が良くないとかで寫眞師の希望を拒まれる方がありますが、あれは決して宜しくありません。疵だの髮だのは、チヤント寫眞師の方で心得て居て後で修整で奇麗に直して上げますから御心配には及びません。

夫れから寫す時に托頭器を非常に嫌ふ人がありますが、アレを行らぬと大底の人は動くものです。俺は決して動かぬから大丈夫なご謂ふ人に限て動くものです。動いたらもうメチャ〳〵で有ます。

夫れよりか悠然と托頭器に依つた方が安全で隨つて平和な顏に寫るものであります。

夫れから寫眞師が寫す合圖をしたならば、其以前から心に愉快なる事を思ふか或は寧ろ何にも思わず虛心平氣で居るかの二つを撰んだ方が宜しいと思ひます。決して動くまいなどゝ思ふてはいけません。却て動きもし、且つリキンだ堅い顏に寫るのであります。

寫す時には動かふが動くまいが、左樣な事に一才苦勞してはいけ

ません。

寫眞師は寫眞師の義務として動いたものは作るべきものではありませんから若し動いたとすれば幾度でも寫換える義務があります。

すから、そこは御心配なく御一任あつて然るべきであります。

尙ほ寫客は寫す時に寫眞師に一任する事が出來ずに自分で氣を揉んで、衣服などを直す人がありますが、自分では中々判るものではありません。加之、切角寫眞師の方で直してあつても、又壞れて仕舞ますから、寫眞室に於ては、總でを寫眞師に一任された方がよろしいのであります。

若し衣服其他に缺點があるとすれば夫れは寫眞師の責任であり

ますから、左樣な節はドシ〳〵寫換を請求する方がよろしいのであります。ツマリ頭の先から足の爪先まで不備の點があれば夫れは凡て寫眞師の責任に歸するのです。

寫眞製出期日を非常に急ぐ人がありますが、寫つてさへ居ればどうでもよいと云ふ考への人なれば、夫れでもよろしいが例へば結婚見合とか、新婚被露の寫眞などは、餘り急いでは丁寧な良いものは出來るものではありませんから、成べく十分の製作時間を寫眞師に與える樣にした方が得策であります。

良い寫眞則ち本當にお氣に召す寫眞を作るには、世間で思ふて居る樣な(ナーニ寫眞なんざあ燒けば一日でも出來るぢやないか)なぞ

〻輕々しく言ふ人があるが、中々以て左樣なオチヤラツカなものではありません。第一丁寧な修整なぞになると、手札半身一枚に一時間乃至二時間は費やして居る樣な譯で、カビネになると、必ず夫れの倍の時間は掛る、集合なぞになると一日掛りである、夫れに燒付にしても、調子が惡ければ幾枚でも燒き換へると云ふ有樣だから其邊の所を御承知あつて、成べく早目に寫して置かれて、少なくも十五日や二十日間位の時日は與へる樣に致したいものであります。

尤も近來素人間の寫眞趣味が盛んになつて參りましたので、寫眞の如何なるものといふ事が判つて來ますれば、自然其點は理解さる〻事と信ずるのであります。序ながら述べますが、こもすると、世間

寫眞を稱へて贅澤品などゝ云ふ人々のあるのは甚しい誤解と思ふのであります。

此考えは、寫眞の初期に於て、寫眞は單に珍しいもの、奇妙なものとなし、殆ど見世物かなんぞの積りで寫した時代の因襲であつて、今日では人間の最も貴ふ可き人間至情發露の交驩に利用されて居るのであります。即ち故人位牌寫眞、家庭安否通信寫眞結婚見合ひ寫眞結婚披露寫眞各紀念用寫眞、就職用寫眞、受驗用寫眞、海外旅行用寫眞等で、此等のものは私共人像專門寫眞師の日々に執りつゝある寫眞でありますが、其他軍事に、工業に、學術に、醫術に、通信に、世界萬般の事業に應用されて居るのでありまして、中々以て贅澤品どころではな

いのであります。夫れから、其人の美點を飽まで現はすには、ツマリ良き顏付に寫すには、どうしても寫眞室に行かれた方が、普通室內庭園、或は閃光撮影などよりは、ズツト宜しいのであります。

見合とか、新婚披露には猶更寫眞室の方が適當であります。

夫れから御婦人方はどうしても、何に彼と仕度に時間を要しますから、春夏の候には午後五時を限りとし、秋冬の候には遲くも三時頃迄に寫眞室に赴かれるが宜しいのであります。

小兒は動搖常なきものでありますから、迅速に寫さなければなりませんので、成べく十二時前後の最も光線の强い時程良いのであります。

集會の撮影などで、器械組立の猶豫さへも與へずして、スグ寫せ、今寫せ、などゝ勢急る人があるが、本當の寫眞を撮るには、そう、チョックラ、チョットには行きません。彼の新聞社の寫眞師の樣な譯には行きません。

彼の新聞寫眞の如きは、手提カメラと稱してホンノ、スケッチ的のものであつて、單に當座の說明丈に止まるのですから、之と混同されては甚だ以て迷惑至極であります。

之に反して專門寫眞師のになると、作品には自家のネームを打ち永久に保存さるべきものでありますから、到底當座限りの無責任では濟まされぬ譯でありますから十分此點に就て御了解を乞ふ次第

であります。

夫れから世間は如何なる理由あつてか知らぬが、寫眞師に對するに一種の侮蔑を以て居る傾向が見られるのであります。其の依て來る處は、前述の通り、寫眞の初期時代に於て、淺草あたりで見世物同樣に致したのが始まりであつて、他の見世物同樣に、遊客の袖を引くなど、其營業振りの劣等なる、彼香具師と少しも選ぶ處なき有樣であつたのが其原因をなした樣に思はれます。

夫れを今日も尙ほ世間が一般寫眞師に對しても無意識とは云へ侮蔑の風があるのは一般寫眞師こそ實に迷惑至極な譯であります。

即ち斯る因襲的誤謬を去つて考へたならば、寫眞師なるものが世

間より斯くも侮蔑を以て遇せらるゝ理由は少しも無いのである。世の誤謬に捕はれたる人々は今私の此書を見たならば速に其誤謬の眼を醒すが良いのであります。

今や世界を擧て因襲的迷夢を打破し競つて自覺に歸りつゝある の時でありますぞ。茲に寫眞師を遇するに侮蔑を以てする一例を擧けて其反省を促がす事に致します。

例へば何時に出張撮影をこ依囑し來る寫眞師は約束を堅く守り出張して玄關に刺を通す、女中又は書生出で來りて應接の後暫時待つて吳れと云ふ。

而して寫眞師をして其間應接室に通すでもなければ茶を出すでもなく、三十分一時間に亘るも更に一顧だも爲す事をせず何時迄も外に放つたまんまにして置く。何たる無禮何たる非常識であらう。實に其非常識なる寧ろ憐れむの外なき有樣である。

假りに之を畫工としたならばどうである。まさか外に立たせたまゝでは置かないのであらう。

何が故に寫眞師よりも畫工に對しては斯く尊敬の意を拂ふのであるが、寫眞師の業果して卑しき處あるか、畫工の業左程に貴き處あるか、敢て一考を煩さんとする所以なのである。

こまること

□ダブルに寫した時

□現像の際、種板が重なつて、クッ付いて離れぬ時。

□閃光撮影の際、發火せざる時。

□現像の際、種板を裏返しに入れた時。

□寫す間際に、取枠が違つて居た時。

□現像中に、赤電燈の消えた時。

□どうしても、眼鏡に反射が來て、仕樣のない時。

□大事な種板をボカリと行つた時。

□引蓋を引かないで、閃光をドンと行つた時。

□寫す間際に、ピントグラスを壞した時。

□修整ニスの乘らぬ時。

□此演說中に寫して呉れと頼まれて、作業中御仕舞になつた時。

□鉛筆を落して根元からポチリ行つた時。

□子供が動いて、どうしても寫す事の出來ぬ時。

□鼻の低い、頬の高い人から、ラインライトを頼まれた時。

□復寫の極く淡いのを頼まれた時。

□見合ひの寫眞で、何處でもいけない顏を持つて來られた時。

□來るが早いか泣いて寫すのを嫌ふ子供の時。

□日暮間際に婦人の仕度で悠々たる時。
□鼻の低い、頬の高い、お嬢さん、奥さんが逆光線の方に是非向くこと仰しやる時。
□込んで居る時、後から來て是非先に寫して呉れこ、お得意に懇請された時。
□景色撮影の際、モデルを頼んで彈かれた時。
□良いモデルを見附けて、知らない處を寫そうこして、ボイこ行かれた時。
□出張を頼まれて行つて、外の寫眞師こダブルに成つて斷られた時。
□出張に行つて祝儀を出された時。

□出張の時、オイ寫眞屋こ呼捨にされた時。
□無暗に瞬きして、寫す際のない人の時。
□寫す時に、連れの人が傍で無暗こオセッカイをする時。
□集合の際、ドット來て、笑のごうしても止まらぬ時。
□花嫁さんを寫す時に、花聟さんが傍で瞬きもせず見守つて居る時。
□下らない假裝なごして、寫眞を玩具に寫す時。
□夕方子供連れで、ドカ〳〵お客が這入つて來た時。
□室外集合の際、寫す間際になつて、お天道樣が、ノコット顔を出してもう引込み相もない時。
□子供が泣いて寫らぬ節、お父さんや母さんが眞劍に怒つた時。

□アバタを消すが良いか、消さぬが良いか、聞く譯に行かぬ時。
□禿頭に毛を書いて呉れと頼まれた時。

大正十一年六月五日印刷
大正十一年六月八日發行

實地の寫眞術
定價金貳圓八拾錢

著者　工藤孝
發行者　東京市京橋區岡崎町二丁目六番地　酒井源藏
印刷者　東京市京橋區南鍛冶町五番地　牧口駒三郎

不許複製

發行所　東京市京橋區岡崎町二丁目六番地　酒井出版部　振替東京六〇一九六番
賣捌所　東京市神田區表神保町四　金櫻堂書店　振替東京二九三八二番

395
787

終